

第6回新城市産業自治振興協議会

平成28年7月13日（水）午後7時～午後9時10分
新城市消防防災センター2階 災害対策本部室

○事務局 それでは、皆さん、こんばんは。

お忙しい中、皆さんお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

それでは、第6回新城市産業自治振興協議会を始めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

本日の出席者は、村松さんが30分ぐらい遅れてお見えになるという御連絡をいただいております。今現在8名でございます。過半数の出席者となりましたので、これで会議が成立ということで報告させていただきます。

それでは、ここから協議会の運営規則第3条の規定によりまして、議長の鈴木会長に進行をお任せいたします。

どうぞよろしく願いいたします。

○鈴木誠協議会長 では、皆さん、どうもこんばんは。きょうも御苦労さまです。

きょうは第6回目の新城市産業自治振興協議会になりました。

この間、議論を積み重ねてきていろいろな成果も見えたり課題も発見してきたりということもありますけれども、この振興協議会、こういう限られた人数の中でもありますけれども、ここで、市の方でいろいろな政策を準備している。その政策は行政が主導するだけではなくて、市民や企業の協力・連携が不可欠であるし、新しいその事業体を創作していくという点においても、どのような方法がいいのか、いろいろな知恵を出しながら新城市の社会を支えていく産業基盤というものを作っていく、そのような点も伺って、協議会ということで、今、議論を進めています。

今日は前回の議論を踏まえまして、2つの報告事項と合わせて協議事項が用意されていますので、これから限られた時間でありませけれども、どうぞよろしく願いしたいと思います。

それでは、最初に報告事項から入りたいと思います。

報告事項1として、事業所実態調査につい

て、これを事務局の方から委員の皆様方へ説明をお願いします。

○白井副課長兼商工政策係長 まず1番、事業所実態調査についてということで次第には書いてあるのでございますが、ちょっとその前に資料の1ページ目を見ていただきたいと思います。

この委員の異動がございまして、まず、その報告をさせていただきますと思います。

6番目に書いてあります新城労務対策協議会事務局の西紋さんが異動になりました。今度、菊川倫太郎さんという方が業務課長になりました。今回、委員になっていただくことの了解をいただいておりますので、菊川さんへ変更になりました、ということがまず1点目でございます。

2点目は、9番目に書いてあります一誠福祉会特別養護老人ホーム麗楽荘の荘長が青山様から後藤様にかわられましたので、お二人の委員の方の異動がございまして、変更させていただきますのでよろしく願いいたします。というということが1つ目の報告でございます。

それでは、この次第に戻りまして、事業所実態調査についてということで御報告させていただきます。

資料の2ページ目でございますけれども、新城市事業所実態調査表という表を1枚つけてございます。

今回、この実態調査につきましては、平成27年12月25日に議決、施行されました新城市地域産業総合振興条例の中で第7条のところに施策の基本的方向という項目がございまして、地域産業の創造及び発展に関する政策は次に掲げる事項を基本として行うものとする、の第1号のところに、事業所の自主的な努力を総合的に支援することとつたわれております。

解説には、雇用の確保とか消費者を意識した商品やサービス開発を積極的に行われる事

業所・事業者に対して全面的支援を行っていきまふというふうには謳ってあります。

実を言いますと、この取り組む内容につきまして、事務局の方でまず分からなければいけないものですから、まず、事業所にお邪魔させていただきますまして、事業所の技術だとかテクニックとかサービス、商品の開発状況をお伺いいたしまして、内容をまず知らなければいけないものから、課の職員がお邪魔してお話を伺うという、実態調査というちょっとかた苦しい名前になっておりますけれども、お話を伺う機会を設けていきたいというふうには考えております。

今のところ、平成28年度としまして製造業、物づくりをなさっている会社の方々、事業者の方々へ、100社ないし200社へお邪魔いたしましてお話を伺ってきたいというふうには考えております。

その調査用紙がこちらにつけさせていただいた内容で、調査する項目でございます。

こちらにつきましては、新城市商工会の事務局の方々にも御協力いただきまして、行政ばかりではなく商工会の方々と、両者で前に進めていきたいというふうには考えております。

それで、雇用の確保とかサービス等々、一生懸命頑張っていらっしゃる事業所の方々に総合的に産業振興施策を検討いたしまして、それを実務化しまして事業の方に実現化したというふうには考えております。

また、お邪魔するものから、いろいろなお話をさせていただくことがあると思います。直接、商工政策課で業務的に内容が違ふものがあるかも分かりませんので、そういった内容をお伺いして、ほかの課が対応するものはほかの課にすぐ連絡をいたしまして対応する、御用聞きみたいなこともしていきたいというふうには考えております。

もちろんこの調査は来年も続けていきまして、いろいろな業種の方々のお話を伺い、産業政策、振興施策に結びつけていきたいとい

うふうには考えております。

まず、第1の報告につきましては以上でございます。ありがとうございます。

○鈴木誠協議会長 報告ではありますけれども、今、皆さんの方に提案された、紹介されたことについて、何か御質問とか御意見とかあれば伺いたいと思ひますが、どうですか。

○松本吉生委員 これは製造業のみということになりますか。サービス業は後。

○白井副課長兼商工政策係長 いえ、まず製造業の方、平成28年度はそちらの業者の方を中心に行おうかなというふうには思ひまして、また来年になったら業種を変えていくという方向で考えております。

○鈴木誠協議会長 毎年これをやらなければ意味がないということだと思ひるので、つまり、一番、これ、目的はまず仲よくなるということだろうし、実際にどのような事業をやってみえるのか、現場の声を聞かせてもらいながら、やはりニーズの把握をするとか、あるいは政策の要望を聞いてくるとかということも大事になってくると思ひのです。

でも、これ、やはり先ほど白井さんがおっしゃったように毎年やるということなので、ですから、ことしは製造業をやつて来年は別の部署をやる、それは違ふと思ひのです。

ですから、ことしは、まずは製造業から始めるけれども、それにプラスして新たなものを付加していくということなので、そういう方針ですね。

○白井副課長兼商工政策係長 はい。

○鈴木誠協議会長 どうでしょう、松本さん、遠慮なく、何か注文でもいいし提案でもいいし。聞いていただいても。

○松本吉生委員 別にないです。

○鈴木誠協議会長 いかがでしょう、河合さんは。

○河合恵元委員 組織が何千件なのか何万件なのか把握してありますか。

○白井副課長兼商工政策係長 2,000事

業所ということで、商工会と打ち合わせして。
○河合恵元委員 2, 000件。今、先ほど課長が言われたこと、またちょっと変わってしまうかもしれないけれども、今年が、今年度が100件。

○白井副課長兼商工政策係長 いや、100から200ぐらいの。

○河合恵元委員 その選び方とか何か決めているのですか。製造業は何社。何組織。

○加藤商工政策課長 製造業の組織ですか。約400です。ざっくり400。

○古田産業振興部長 4人以上で工業統計にかかっているものが、今、160社ぐらい。プラス、もっと小さいところがあるので。

○加藤商工政策課長 それに建設とか合わせて400ぐらいです。

○河合恵元委員 それを何に使うのかということが素朴な疑問で。

○加藤商工政策課長 先ほど先生が言われたような、とりあえず今まで疎遠だったわけではないのですけれども、余り行政と民間の方とお近づきになる機会がなかったものですから、御用聞きを兼ねながら、いろいろな要望を聞きながらという部分が一番です。

○河合恵元委員 ただ、時間がかかり過ぎると思うのです。

○加藤商工政策課長 そうですね。

○河合恵元委員 みんな集まれとって一回集めてもらったら。何社来るかわからないけれども、何曜日に集まれと。

○加藤商工政策課長 河合さんが代表をなさっています商工会の工業部会とかで集まりがあれば、そういうところに行って、まとめてお話を聞くということも考えていますけれども。

○河合恵元委員 まずは御用聞きなので、大変というか必要なことだと思うのだけれども、何をやっているところとかという情報がまず知りたいのだったら、新たなこういう条例が出来て、ということをしてPRしながら、みんな

集まってくれ、頼む、と言ったほうが早くて結果も出やすいのではないかなと思うのだけれども。

○加藤商工政策課長 それも考えさせてもらいます。

○河合恵元委員 予算も少なくて済むし。

○加藤商工政策課長 早速お願いします。

○河合恵元委員 と、ちょっと思いました。

○加藤商工政策課長 ありがとうございます。

○鈴木誠協議会長 いろいろ、ぜひ提案してもらったらいと思うのです。

ただ、事務局の方も今日は案としてこういう調査をやっていくと。

ちょうどあれ、センサスがあるかもしれないね。

○加藤商工政策課長 そうですね。

○鈴木誠協議会長 そういうこともあるので、ああいう一般的なものにプラス、さらに新城の実情というものを公に探っていくということで、最近是非常にこういうことをやるのが大事だということも出てきた。

その辺は商工会が、実績が十分あるので、そのあたりの成果を踏まえながら独自性をまた追求して調査をやっていく、そういうことだと思うのです。

どうでしょうか、他に。

○佐藤真琴委員 今年度200社というお話なのですけれども、あと8カ月ぐらいしかないのですけれども、来年度まで。200社もあるとすごく大変かなと思ったので、河合さんと同じ意見で、ちょっと集まってくれる人は少なくとも、何かすごく課題意識があって来てくれる人は前のめりの人たちなので、やはり一番話を聞きやすい人たちだけでも少し集まったりして、お互いに横のつながりも見えるし。

少なくとも事業所側からすると、浜松からもたまに来るのですけれども、この人は何をしに来たのかわからないとこちらも話せないで、何をしに来ましたということは事前に

分かるようにしてください。

河合さんのところのように大きなところと、私たちみたいな、いわゆる先ほどの零細400件と書いてあるようなところは、欲しい情報が違うと思うので。

商工会の何か大きなことをやっていらっしゃるところと一緒にいったほうがいいだろうし、私たちの場合だと信金の、中小零細の担当者、人と一緒に、現場感のある人と一緒に来ていただいたほうが、来られた方としてもメリットが出やすい。

営業マンになられるわけだから、営業マンがろくな提案を持ってこないと余りこちらも、多分、話す気にならないと思うので、いい意見を出していただくとよりいいかなと思います。

○鈴木誠協議会長 いい提案ですね。ありがとうございました。

ほか、どうでしょうか。

松本さんの研究会も、今の佐藤さん、一緒に職員の人も。

○松本吉生委員 そういった意味では、この前の包括協定などもさせていただいているので、例えば、そういうものを5つあるので、四、五十社ぐらい行けば、なのかな。

○佐藤真琴委員 新人の営業マンでまだ何か持っていない子とか、ついていくといいかもしれないですけども。

○河合恵元委員 そうですね。残念ながらうちにはいないので。

○佐藤真琴委員 では、ベテランも。

○河合恵元委員 僕なのか、わかりませんが、あるかもしれないです。

○鈴木誠協議会長 ついでに、信用保証協会の職員も説得してというか。それこそ零細のところはとても重要ですけども。

今年、信用保証、信用保証とは、要するに、融資を含めて銀行にいろいろな相談をするという小規模事業所がすごく増えているのです。保証申請が、保証承諾が減っているのです。

過去にないぐらいの勢いなので、ちょっとここはやはり、特に経済的に不利なところはもっと深刻なので、ぜひこの辺の力をまずは。

あとは皆さんも、多分、協力して下さると思いますが。

どうですか。皆さん、何か。

○佐藤真琴委員 緊張してしまってしゃべれないと思いますけれども、普通の事業者。

○松本吉生委員 そんなことはないです。

○佐藤真琴委員 うちの会社に松本さんと市の人が2人で来たらどうしようみたいな。

○鈴木誠協議会長 では、ひとまずこういうことを始めるので、始めるに当たって、今日話題に出たように対象をどこにするのか。一応、製造業を初めとして100から200とちょっと幅がありますけれども、そこからするといいですか、多分それは、これまでの商工会などの実績を相当、最初は当てにしながらということもあると思いますけれども、やはりそれぞれが事業者のところに出かけて、なかなかこういう、集まれと号令をかけても来づらいとか言いづらいとかどうしたらいいのかわからないとか、事業承継をもう諦めているとかさまざまなところがありますので、そういったところの情報を考えると、やはり一方では出かけて行って、最初は来ると言われるかもしれないけれども、しつこく、仲よくなりながらそこでこういう調査に協力いただくというところはやはり必要なかもしれない。

その上で、どういう対象がいいのか、どういう方法がいいのかはまさに事業をやっている皆さんの御経験もあると思うし、その辺を踏まえてぜひ事務局の方にそれぞれでいいですから提案をしていただくと助かります。

可能であれば御協力をお願いしたいと思います。

では、報告事項の1つ目としては事務局、それでよろしいでしょうか。今、その意見をいただきましたので、いつまでに、例えばそ

ういう情報提供をしてくださればそれを踏まえてできるのか。

○加藤商工政策課長 情報提供は今月中でも大丈夫なのですが、今週中に河合恵元委員と松本委員のところにはちょっと伺って、もう少し具体的な話を詰めて動いていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

○鈴木誠協議会長 では、河合さん、松本さん、御協力をまたお願いいたします。

それでは、2つ目の『市民自治』・『地域自治』・『産業自治』3つの自治の仕組みというところです。

では、これを、事務局の方から説明をお願いいたします。

○加藤商工政策課長 それでは、新城市の今の現在の取り組みであります、この『市民自治』・『地域自治』・『産業自治』について、私の方から簡単にちょっと説明させていただきたいと思っております。

新城市では、皆さん御存じかと思いますが、新城市自治基本条例というものが制定されております。この条例は、目的は市民が主役のまちづくりを推進し、元気に住み続けられる世代のリレーができるまちをつくること、というふうに謳ってあります。

こちらは市民が担う、市民が自治している、ということを目的として、これを実現するために基本的な理念だとか市民と議会、行政、それぞれまちづくりに関して果たす役割だとか、お互いがつながり、協力し合う仕組みについて、ということで条例で定めております。

その中で、条例の中には地域自治区について定めてあります。その地域自治という部分に関しましては、地域の実情を踏まえた施策を適切なきに実施するという事で、地域をよく知っている、実際に暮らしている住民の意見というものを大事にしようと、そのためには市長の権限の一部をそれぞれの地域へ移して、現場でその問題を解決していこう、

ということに取り組むために地域自治区というものを設けてあります。

新城市内を10個、中学校区単位ですか。作手は作手村、新城は中学校単位、鳳来は、船着は違いますが、10地区に分けてあります。それぞれの10地区が、作手村、よくここでも話があるように、作手村では農業をすることでとか、新城だと住宅地だといろいろ地域に特色が分かれていますので、それぞれの地域の市民の意見を反映できるように、身近な課題を素早く解決するという事に取り組むために地域が担う、地域が自治をすることで地域自治ということを決めております。

最後に産業自治ということで、この、皆さんが協議会で委員となって協議してもらっているところが、先回、グループでお話していただいたときも産業自治とは分かりにくい言葉だという意見もありましたけれども、産業が担う、産業が自治をしていく、条例の中にもありますけれども、地域産業の創造と発展というものは、国・県の取り組みに追随するのではなくて、市民、事業者、市がそれぞれの役割を果たす、協働することで魅力あるまちをつくっていく、みずからの意思として示すため産業が自治するという考え方を示す。

今まで新城らしさとは何でしょうかというような話をしたときに、新城らしさとは山が多いだとか観光地があるよだとか、川がきれいだという新城らしさではなくて、この地域自治、産業自治というような、この3つが自治するという取り組みをしているのはなかなか行政としては珍しいということで、この新城らしさというものがこの市民自治、地域自治、産業自治という取り組みだというふうを考えて、これを新城らしさとしてこれから取り組んでいきたいというふうを考えております。

ちょうどこちらの方、きょう見えております鈴木教授が市民自治に関しまして市民自治

会議の会長でもありますし、地域自治の仕事にも携わっていただいております。また、今日の会議、産業自治振興協議会の会長もしていただいておりますので、先生からも少しつけ加えて説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

○鈴木誠協議会長 今、加藤さんが非常に丁寧に説明をしてくださったので、若干だけ、よそ者としてつけ加えることをもう少しだけコメントしようかなというふうに思っています。

僕は新城市に住んでいる訳ではないし、ここで働いている訳ではない、よそから新城市を見ているわけですが、よそから見ていて本当に評価して応援したくなるなどという、実は取り組みを始めているわけです。

なかなか新城市に住んでいて事業をやってみえる方からすると、こういう姿はなかなか見えてこない部分もあるかもしれないです。外から見ると、本当に隣の庭が物すごく生き生きと、青々としてうらやましいというふうに言いたくなるぐらい実はいい仕組みを設けているのです。

それは新城市というところが、これが1つの基礎自治体としてまちづくりを進めていくことが求められている訳ですが、それをどうやってやるかということは、実は、かつては国のいろいろな法律に基づいてとか、あるいは法律に準じたいろいろな指示に従って取り組めばいいという時代が長く続いていたのですけれども、ちょうどバブルの終わった後ぐらいから地方分権ということが言われるようになって、制度が変わってくるようになりました。それがちょうどITバブルのころに、日本がちょっとやばいぞというふうになってきた2000年ぐらいから本当にがらっと変わって、特にその後、小泉さんが首相になったときに自民党をぶっ壊せとか言って、言い始めて、それで、市町村合併をがんと日本で進めていくということになったとき

に、合併をして強い自治体をつくるばかりで本当にいいのかという議論がものすごく起こって、そのときに合併をするということは、これは行政の都合でもあるのだけれども、同時に責任を持ってまちをつくっていく、そういうことをやらなければいけない。そのときに、それぞれのまちで考えて、独自の方法で積極的にこれからまちづくりを進めていって欲しいということを一方で言い始めたのです。

なかなかそうは言っても、どうやっていいのかよく分からないところが多かった中で、全国で15の自治体は実はユニークな仕組みを設けたのです。それが地域自治区制度というもののなのです。

全国で、今、1,700弱ぐらいの市町村がある中で、市区町村がある中で、地域自治区制度を設けているところは15しかないのです。

一番しんがりから頑張ってくつついてきたのが新城市なのです。新城市でこれを設けた訳ですが、15とはいっても1つ大きな特徴があって、何かというと、非常に広い面積で、しかも山間部を抱えているところで広域合併をした都市、自治体です。こういったところでこの地域自治区制度というものを導入した訳です。

新しい市になったのだけれども、旧来のその地域の特色を生かしながら、そこに暮らす住民の人たちの参画、協力を得ながらそれぞれの地域の良さをつくっていかうと、そして全市というふうによく言うけれども、なかなか全市にはなり切れないところもある一方で、全市の良さというものは、結局はそれぞれの地域の魅力であるとか、住み心地の良さであるとか、それから、子供の元気な声が鳴り響くような自然の豊かさであるということになっていくので、大きくまちが合併しても、結局は旧来の地域と地域をやはりより良くしていかなければいけない。

そういうことで、これが地方自治法という

法律できちんと設けられて、それをやるのだ
ったらこれをしっかりと責任を持ってやって
くださいというふうに言われるようになって
きました。それで新城市は、今、全国15の
市町村の中ではしんがりで、この地域自治区
という制度を導入して、全市でも頑張るけれ
ども、この市内、10の区割りを設けて、そ
の地域地域の良さを、これも行政も責任を持
ちながら一方で住民も頑張るといことで宣
言をして取り組んできているのです。宣言と
いうのは、つまり条例をつくって取り組んで
います。地域自治区条例というものを作っ
ています。

行政も頑張るといふに言っているのは、
この地域自治区予算というものに1つあらわ
れていて、まち全体の取り組みを責任を持
ってやるのだけれども、そのまち全体を行政が、
議会が、それらが上から目線でやるのではな
くて、地域地域の予算要求というものを出し
てもらって、そしてそれを行政が責任を持
ってやるという仕組みを設けているのです。

これがうまくいくようになるまで、大体1
0年ぐらいかかるということを豊田市の人た
ちは言っていました。何と言っても住民もこ
んな制度になれていないし、何で行政の仕事
をやらなければいけないのか、給料をもら
ってないぞということを最初は言っていたので
すけれども、でも、ガードレールのことであ
るとかカーブミラーのことであるとか消火栓
のことであるとか、それから廃棄物の管理で
あるとか、いろいろな地域での困りごととい
うものを、これまでは行政に何とかしてくれ
と言っていたことを、予算を、こういうもの
を検討して予算がついて、どうやったらうま
く、今言ったようなことをクリアしていける
か、それは、きょうは村松先生もお見えなの
ですけれども、そういう地域の医療のことな
どもこういう制度の予算を活用して、医師会
などの協力を得て地域の実情に合った健康管
理とかいうこともやっていこうというふう

なりつつあるのです。そういうところで地域
の声を聞いて、行政がサービスをしていくと。

それから、住民も頑張ろうといふところが
地域活動交付金という制度で保障されていて、
この制度を持っているところはなかなかない
です。地域活動の補助金というものは結構あ
るのですけれども、交付金のようにしてそれ
ぞれの地域が何にお金を使うのかということ
を考えて、そして使っていけるということが
出来ているところは非常に少ないです。そう
いう面です。

もう一つの、ですから、こういう面では地
域が自治をする。つまり地域に暮らす住民や
人が、こういった人たちが自分の暮らしをよ
り良くしながら、地域社会をより良くしてい
くためにこういう地域自治ということをや
っていけるようになったのが新城市の特徴なの
です。

すぐお隣の豊田市も新城市に先駆けてこう
いう制度を導入しました。

もう一方の市民自治、これが新城市のもう
一つの大きな特徴で、その地域という区割
りにとらわれずに新城市全体を見渡して、や
はり市民がいろいろな夢を描いて、そして地
域を、新城市全体をいい方向に持っていこう
と、そのためにNPO活動をしたりとか、それ
から若い人たちがいろいろな提案をしたり、
といことができるような仕組み。

それから、女性の人たちもここに参加をし
て意見を言ったり、こういう活動をしたり、
市の事業に提案をしたりといことができる、
そういう参加の仕組みというものがこの市民
自治というところで、自治基本条例で保障さ
れているのです。

ですから、新城市は若者議会とか若者政策
という非常にユニークな取り組みをしていて、
よく若い人たちの仕事がないとか、それ
から若い人たちが帰って来づらい町だとか、
よくそういうことを言うところが多いので
すけれども、やはりそういう当人の若者たち自身

新城市の住み心地の悪さとか、あるいは暮らしやすさとか、それから、どうやったらもっとここに若い人たちが居を構えて、あるいは訪れたりすることがし易いのかと。若者目線で考えて提案しようということを、これやっつけていける条例なのです。

これは、全国でもこういう若者条例というものを設けて取り組んでいるところは非常に少ないというところで、市民という言葉でくくるのではなくて、市民を構成しているお年寄りとか、特にここでは若者、それから女性という、そういう主人公がまちを良くしていく、自治をするというところに特徴を持った、持っているということなのです。

ですから、新城市のまちづくりという言葉で言っても、若者とか女性とか、そして地域の事業所とか、それから企業とかさまざまな主人公がこういうまちづくりという1つの政策に参加・協力をしていけるといいう制度づくりというものが出来ていると。

それをもっと産業自治という観点でも項目を1つ設けて進めていこうという、こういうことができるようになったのです。市民ということ、これが若者、女性、そして地域というところが市内10地域のお年寄りとか、それから非常に個性のあるお祭りを維持している団体とかNPO。

そして、それに今度は新城市内で人を雇用するとか、事業を続けて経済を支えている産業がここに入ってくるという形で政策、新城市のまちづくりという政策をいろいろな主体が協力してやっつけていこうという体系が出来ているというのが新城市の特徴というふうに、よそ者が見るといいなというふうに思います。

この3つが、どこもないところが愛知県内の5分の4の自治体です。残りのところで市民自治課、地域自治課というところ。でも、産業自治というところを持っているのは、今うたっているところは安城市と知立市と高浜市と、そして新城市が産業の側面からまちを

良くしていこうということを積極的にまちが謳って、企業内なりが協力しているのです。そういう特徴があると思います。

済みません、よそから見るとそんなことしか言えない。

○事務局 ありがとうございます。

○鈴木誠協議会長 それで、今の新城市の特徴である市民自治と地域自治と連動してこの産業自治、産業がまちをつくっていくということこれから、では産業がまちをつくとっても具体的にはどういう産業がこれからの新城市のまちづくりに貢献していくことができるのか。既存の事業ではどのような関りをしてもらえたらいいのか。あるいは既存の事業がもっと発展するにはどうしたらいいか、こんなことをこれから考えていかなければいけないということがこの協議会の大きな目標でもあるということだと思います。

そういうことで、この新城市のまちづくりの模式図、相関図というものを今日改めて皆さんに提示して、今やっている、やろうとしているところがどこなのかということ、これを見ていただきました。実はこれ、見ていただくと、真ん中に産業自治と書いてありますが、この真横の左側の市民自治を担っている若者や女性の協力も得ていかなければいけないし、それから、地域自治と書いてある右側のほう、この産業という場合でもその地域性を考える、山間地区などではこういう山間地域の、例えば空き家であるとか、それから校舎を利用して、ここでコミュニティビジネスをやっつけていかなければいけないとかですね。

いろいろなことにつながっていきますので、ですから、産業自治と市民自治と地域自治がばらばらではなくて、下のところにも書いてあるように産業自治を中心として市民自治、地域自治をうまく活用しながら新城市のまちづくりをしていこうということが、これがこの協議会の大きな狙いでもあるということです。

こんなところですよ。

○事務局 ありがとうございます。

○鈴木誠協議会長 では、いいですか。

○事務局 はい。お願いします。

○鈴木誠協議会長 それでは、本日の報告事項は2つぐらいなのですからけれども、今日、これからの時間を協議事項、協議内容としてこのことにちょっと力を注いでいきたいと思えます。

今ちょっとお話ししたこととも関係するのですけれども、新城らしさを生かし、産業としての力をつけるにはどうしたらいいかというところなのですからけれども、このことについて、事務局から説明をお願いします。

○加藤商工政策課長 こちらの方、協議内容、今、先生からお話があったものなのですからけれども、第5回協議会のときに各班でそれぞれお話をしていただいたことを事務局としてまとめさせていただきました。

第4回、第5回とビジョンだとか計画を皆さんにお示しさせていただいて、それについて話をしたところ、大体、内容的には理解できたというお話もあれば、もう少し具体的にどういうことか分かり易く説明してくれた方が話しやすいと。

ここにいる人たちは分っている部分も多いと思うのですけれども、一般の方からすると分っていることが分かりづらいなど、産業自治という言葉がキーワードになると思うけれども、理解できる人が一般の方でどれぐらいいるのかということも考えて、もっと分かり易く表現してくれたらどうかというようなビジョン・基本計画についてお話をいただいております。

あと、協議会の考え方で、具体的な話を提示されて話をしていくと、それについてみんなが意見を言う、市が決めたことについて意見を言って叩いていく図式で終わってしまう危機感が抱かれると。

ある程度の仮説目標があって叩くのはいい

ことかもしれませんが、それについて意見を出して進めていくのならばそのようにした方がいいと。

最終的には、この協議会では数値として見える形にして、それをみんなでしっかり管理して進めていくという進め方が必要ではないかという意見もいただいております。

あとは、3つの目標に対して5つの政策はこんな感じでどうだという話をさせていただいた中で、地域内の経済循環という話がありましたけれども、こちらのほうも地域内で循環を考えるだけではなくて、外でお金を使いたいというような部分もあると思うので、しっかり稼いでいただいてお金も使うというような方向性、また、産業間連携と地域間連携という部分では、この話自体、話をしていくとこれがもう総論の話で、なかなか進みにくいのではないかという話がありました。

最後に1つ、地域産業振興と人材育成・確保という部分では、皆さんが例えばということで新規就農者の話、やりたいけれどお金がない、来ても受け入れ体制がうまく出来ていないというようなことだとか、そのことを法人化して地域で皆さんが入ってきやすいという形をとれば、就農するときに仕組みとしてその人たちを育てる仕組みにお金を投入するというようなことをしたらどうかという話が出ておりました。

最後に一番のまとめとしましては、出ていく者は仕方ないけれども、入ってこられる方、ここで暮らしやすい新城市というものがつくれたらいいのではないかというお話があったり、住むことは出来る、だけでも出て行って帰ってきた人が住みやすい、今いる人はさらに住み続けたいと思うような生活の持続可能性をもっと求めた方がいいのではないかという話をいただいております。

そこで、事務局の方でそれを考えたところ、この地域自体がすごく生活しやすくなるということを一つとして、もう一つはこちらの協

議内容にありますけれども、産業として稼いでいく力をつくる、また、それを稼いでいく人をつくるということを協議していきたいということでこの議題とさせていただいております。

本当に簡単ですが以上です。よろしくお願いいたします。

もう一つ、よろしいですか。

○鈴木誠協議会長 どうぞ。

○加藤商工政策課長 前回からもう一月余りたってしまっていて、なかなか皆さんには非常に伝わりにくいと思うのですが、今回、第6回の会議は早急にまとめまして、第6回はこのような会議でしたということで、その中から次回はこういうことを検討していきたいということを早目に提示させていただいて、次回につなげていくようにしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

以上です。

○鈴木誠協議会長 この会自体も最初は7月末ぐらいというふうに言われたのですが、河合さんが、それでは忘れてしまうということで、早目にやろうということを提案していただいたことから、こうやってこの時期に持つことができました。もっともっと委員と事務局の運営を密にして、やるべきことを明確にして取り組んでいこうということを宣言していますので、また協力をお願いします。

それでは、この間の議論の積み重ねも踏まえて、今日はこの地域自体がすごく生活しやすくなる、そのためには今後何をどうすべきか、何をするか。それから、産業として成立、あるいは産業として稼いでいく、稼いでいける人材をつくるにはどうすべきか、こういうことについてこれから2つのグループに分かれて議論をしていきたいというところです。

また松本さんと佐藤さんに少しリードさせていただいて、今日のテーマをよくお分かりになっていますので、皆さんをリードさせていただいて、議論を深めていくようにしたいと思います。

います。

それでは、ちょっとテーブルを作りますので、協力をまたよろしくお願いします。

○事務局 それでは、Aグループということで佐藤さん、梅津さん、天野さんと澤上さんがAグループ。

Bグループが松本さん、河合さん、村松さん、石田さん。

ということでグループに分かれていただきたいと思います。

では、Bグループの方はこちら、Aグループの方はこちらということで、移動を済みません、よろしくお願いいたします。

○鈴木誠協議会長 それでは、今から時間制限られていますけれども、50分ぐらい時間をとって、それぞれのグループで議論をしていただきたいと思います。

今、皆様のテーブルの方には事務局の皆さんも入ってもらいましたので、事務局の皆さんも議論に関ってもらっていいと思います。

ただ、事務局と皆さんとの意見交換という形とか説明会になってはいけないので、事務局の皆さんも皆さんと一緒に議論へ参加していけるような、そんなことを意識して進行をお願いしたいと思います。

それでは、よろしくお願いいたします。

(佐藤班討論開始)

○佐藤真琴委員 では、よろしくお願いいたします。

という話があったのですが、まちづくり、3つの自治の中で、このところが、今、話し合っているところで、この中のここを達成していくために、今日は3つのテーマが出ていまして、今、御自身がされている仕事についての支援とか連携はどのようなものがあったら、より自分の事業が加速して、より事業が発展すると思いますか、ということが1点目。

2点目は、この新城市の産業、自然、文化、人、新城市を広く生かした、あれば利用したいと思うものはどのような産業ですか。これは何か、もやっとしていて難しいですね。

3つ目は、その産業を実現する人をどのように育てればいいですかという2つの軸に分かれていると思うのですけれども、まず、御自身のされているお仕事について、どのような支援とか連携があると、よりお仕事をやりやすくなるかという意見交換をしていきたいと思うのですけれども。

どういう順番で行きましょうか。

やはり、あいうえお順で天野さん。

○天野勇治委員 そうですか。

僕は農業ですので、自分の作っているものでお米と子牛ということで、その2つで出したのですけれども、お米のほうは地元の、ミネアサヒというブランドがあるのですけれども。そのブランド力のアップ。

○佐藤真琴委員 ブランド力のアップ。

○天野勇治委員 だから、やはり中山間地でやっていくには、例えば安城の価格と同じではだめ、全然、何十分の1になってしまって立ち向かえない。

○佐藤真琴委員 そうなのですか。

○天野勇治委員 価格が一緒であると。だから、いかに付加価値をつけて。

だから、そうしないとやはり、それだけでもなかなか難しいのだけれども、そういうことを思うとやはり、例えば妙な話、農協にお米を出荷してミネアサヒといっても新城に出すと、ミネアサヒはミネアサヒで全部値段が一緒なのです。

○佐藤真琴委員 では、その産地ではなくて、どこでとれたのか。

○天野勇治委員 もう結果の、ブランドで値段が決まってしまっているのです。

だから、農協にもそのような話をするのだけれども、やはり地元の農協の中で、やはりどこどこ産の何々は違うのだよという、そう

いうものを作って行って欲しいということがやはりお米の方は1つあります。

もう一つ子牛の、繁殖和牛をやっているからあれなのですけれども、1つは僕たちが子牛で出荷したものが肉になるのですけれども、それを例えば肥育屋さんが買って行って、肉になるのですが、たまたま今、新城の市場の購買者というものが、県外が7割とかそんな感じなのです。愛知県内は3割ぐらい、極端に言うとそのぐらいの差があるのです。

というのは、もうずっと5年ぐらい前に、価格が低迷していたときに、よそは高いのだけれども新城の市場だけ安いと、そのときは県内の購買者が7割から8割だったのです。県外はすごく値段がいい。なぜかという、愛知県はブランドがない。肉の。

結局、そこがだめで、地元の人だけの肥育屋を頼っていたら死んでしまうから、松阪の人を呼び込みに行ったりとか、意見を聞いて、今、この5年ぐらいで逆転したのです。県内の購買者が3割、県外が7割という形で、たまたま相場も良くなってきたからあれなのですけれども、そういう意味で、やはり今は地元のブランド、三河牛というブランドがあるのですけれども、そのやはり、お米とよく似てしまっていますけどブランド力のアップ。あと、もう一つは、今までの新城の市場に来ていた人というのは、新城の市場は日本全国でも下から数えたほうが早いぐらいの小さな市場なのです、取り扱い頭数が。ということは大きなお客さんというか、市場からはなかなか来づらいというところで、それでも来てもらえるような市場、付加価値、牛の付加価値であるとか、その内容をしていきたい。そうなる僕たちの愛知東だけでは全然どうしようもないから、県内の方でまとまりをつけて、結局、新城の市場の4割ぐらいが愛知東の牛なのですけれども、結局、4割良くても、後の6割がだめだったら、結局、新城の市場はだめだとなってしまうから、今は逆に、

たまたま僕たちの和牛の子牛の世界では、今、僕が動いていることは、県内単位で良くしていこうということを、今、なるべく持ちかけているというか、一応、そのようなことを自分の中でやっていけば、もっとよく、悪いときが来ても助けるような形になる、抑えられるというか、一応そのようなことを思いました。

○佐藤真琴委員 県単位で、牛に限って言うと、やはり県の単位で新城牛ではだめなのですけれども、県単位だと何とか牛というすごく強い、例えば松阪というように、そういうようになっていくと外と闘い続けていけるということですか。

○天野勇治委員 松阪牛というのは、肉牛なのです。僕たちは繁殖の子牛だから。

○佐藤真琴委員 子牛がその先、どこかに行きってブランド化。

○天野勇治委員 子牛が、肥育屋の松阪牛の人が買ってくれるような牛。

○佐藤真琴委員 松阪牛につながる、松阪牛のもとというような。

○天野勇治委員 そう、そう。それになるようなものにしていこうと。例えば、飛騨牛とか近江牛とかいろいろあるのですけれども、結局、僕たちはどうしても中継、中間の仕事になりますので。だから、愛知県の三河牛というものも大事にしながら、一方ではそういう他県の本当にブランド力のできたところに合わせることもやっていかないと、ということのその2つかなというふうに一応思っ書いてのすけれども。

○佐藤真琴委員 戦略的に三河牛。でも、行き先はある程度決めてしまって、ここ向けの牛というものを作れるぐらいになると、より安定するのですか。

○天野勇治委員 そうですね。

○佐藤真琴委員 そうですよ。

○天野勇治委員 ただ、県下で協力するということは、ただ、頭数がないと、やはり来

てくれないのです。

○佐藤真琴委員 規模を押さえておかないと。

○天野勇治委員 そうです。だから、今はいかに。具体的な話になってしまうと、市場の頭数を増やすために県内の努力とか、あとは県外から一緒に、例えば県外から新城はまあまあ売れるから、県外は余り大きな子牛市場がないのです、だから、新城に持って来ると売れるぞと、愛知県の市場に持って来ると売れるぞというような状況をつくっていく、頭数を集めるとか、そのようなことも、一応、経済連と一緒にやってはいるのです。

○佐藤真琴委員 県内に、そもそも子牛の頭数はある程度いるのですか。

○天野勇治委員 います。

○佐藤真琴委員 いるのだけれども、それをみんなばらばらに売っているから、ならないと。

○天野勇治委員 非常に具体的な話になってしまって申しわけないのですけれども、子牛市場というものと僕たちみたいな和牛の繁殖農家というのは、県内の約半分と見たらいいのです。愛知県内で生まれる子牛の。あとは酪農家で生まれる。

○佐藤真琴委員 そうなんだ。

○天野勇治委員 受精卵移植した牛が生まれるのは酪農家で生まれる牛が県内の約半分が豊橋市に、僕たちよりも小さい段階で出す牛がいるのです。スモール市場という。だから、その2つに分かれてしまっているのです。非常に厄介で大変申しわけないのですけれども。

今、それを一応、合併する話を、今、経済連と話をして何とか話がついたから、そのようなことも今は考えて、市場としての価値を上げるにはやはり頭数もというところもありますので、ちょっと新城市から離れてしまうと思うのですけれども。新城市から出てしまうということですが、僕たちの産業として生き抜いていくためには、そういうことも今、多分、現実的にもうこの2年ぐらいに

はなりそんな動きまで一応来ました。

○佐藤真琴委員 それは市役所の何とか課というようところが一緒にやってくれているのですか。

○天野勇治委員 もうそれは全然、自分たちでやっています。

市役所は新城市だから、ただ、経済連が市場を持っていて、僕たちは経済連に言っているのです、それは。

○佐藤真琴委員 何かそれは一緒に。

○梅津浩史委員 ここに入るのではない。

○佐藤真琴委員 そう、そう。

○梅津浩史委員 どのような支援を市に頼めば、もしかするともうかるかもしれませんねということが、今、天野さんが言った話の中からすると、まずブランド力ということ、これは市でも何か、出来るようにするとか。

○天野勇治委員 なるほど。

○梅津浩史委員 そういうこと。

○天野勇治委員 ここに係るものですね。

○梅津浩史委員 それと、先ほど子牛と言われていたように、どれぐらい頭数があるか僕たちはわからないので、できれば新城市内で販売ができるような環境をつくれとか、市の中で。

要は、よく分からないことが、先ほども言ったように市場がどうなっているのか僕たちは見えていないので。

○天野勇治委員 そうですね。

○事務局 今、連携を市がと言われたのですが、天野さんの話をほとんど聞いていて、系統出荷、農協、市場に出して経済連に行って流れていきますというところから脱却しない限り。

○梅津浩史委員 難しいと。

○佐藤真琴委員 そうですね、外に。

○天野勇治委員 僕たちはやはり市場がもう県。それだけはどうしようもないのです。

○事務局 なので、この話になると、経済連だとか県単位なので、県と一緒に連携して。

○佐藤真琴委員 でも、市民なのに助けてくれないのですか。自治ということで。

○梅津浩史委員 そう、そう。

○天野勇治委員 県に言っています。今、県の畜産課に直接話をしているのです、僕たちは。

○梅津浩史委員 いや、だからそれの中に市が少し何かの力を、という。

○天野勇治委員 市よりも経済連のほうが強いのです、意見は。

○梅津浩史委員 違う、違う、県とは。

○天野勇治委員 もう完全にそういう流れになってしまっています。

○梅津浩史委員 ということは、ちょっとなかなか。

○事務局 そこが、農協さんが悪く言われる強いところなのです。

○佐藤真琴委員 悪く言われる強いところは牛ではないですけれどね。

○事務局 そういう世界なので。

○佐藤真琴委員 視点を変えて何かやっていると、結局、今そうなのですよ、だからだめなのですよ、という、お上が言うからだめなのです理論からやはり脱却したほうがいいと思うのですけれども。

○事務局 それが目指しているところなのですけれども。

○佐藤真琴委員 そうなのですよね。

これは、だって、ここに産業があって、もうかりどころがあって、これだけ頑張っている人がいて、全国にやはり出ていく牛がいてと思ったら、このもうかることが外に流れていくことを新城市は指をくわえて見ているということですよね。

○事務局 その中で、唯一救いなのが。

○天野勇治委員 鳳来牛だね。

○事務局 鳳来牛という牛がいるのですけれども、それは天野さんが言った、子牛が少なく、それを育てる、肥育される方も少ないので、幻の和牛です。

○天野勇治委員 それもちよっといろいろ問題があるのですけれども。

○佐藤真琴委員 ありますよね、きっと。

○事務局 それは本当に肉質的には、部長もよく言うのですけれども、松阪へ行って、変なところに行って食べるぐらいだったらこんなたく長篠へ、農協がやっているところなのですけれども、そこへ行って食べたほうが、天野さんが育てた牛を市内の肥育屋が買って行って、育てて出しているものなので、おいしいというところはぶつけられるのですが。

○天野勇治委員 難しいのは鳳来牛が、肥育屋さんがやはりメインじゃないですか。そこがまた、僕たちは中間だからすごく牛って。

○梅津浩史委員 今、聞いていても、全部子牛から全て肥育屋になっているので。

○天野勇治委員 そうなのです。だから、僕たちは本当に中間の商売だから。

○梅津浩史委員 だから、そこは。

○天野勇治委員 PRしていくところがすごく難しく、繁殖というものは、名前が出てこない、どうやっても。

○佐藤真琴委員 ウナギにそっくりですね。

○梅津浩史委員 そう、そう。

○天野勇治委員 そうだよね。

○梅津浩史委員 だから、下手をすると競馬の馬ではないけれども、いい受精卵で、いい子牛が出ているというふうに何かできないのかということは、ちょっとアイデアはないのですか。

○天野勇治委員 それを今、結局、いい受精卵というものはいい血統の牛。

○梅津浩史委員 いい血統の牛からの、それをもらって繁殖していくのが新城で、それはもしかすると。

○天野勇治委員 それを今やっています。

○梅津浩史委員 松阪の牛とやりとりができて、もし、もらえんかとか。

○天野勇治委員 それで、今、松阪の牛とかね、買っていつてくれるのです。

○佐藤真琴委員 やっているのですよね。それで売れるようになってきたのですよね。

○天野勇治委員 そうなのです。売れるようになってきたのです。

○事務局 それで、古きよき行政の流れで補助金を出しているのです。

○天野勇治委員 何、その言い方。

○佐藤真琴委員 でも、その補助金の使い方を何かちよっと変えなければいけないのですよね、きっと。

○梅津浩史委員 そうだと思う。

○佐藤真琴委員 もちろん天野さんたちが売って食っていくということは一番大事なことで、それは事業者の努力でやっていくのだけれども、その次に何か違う方向性はないですか。

○天野勇治委員 分かった。規模拡大をするように、今、いい血統のお母さん牛を買ってくると、5万円くれているのです。

ただ、酪農家も含めて300万円の予算なのです、確か。ということは、60頭ぐらいで、今、1頭、子牛のいいもので100万円ぐらいするのです。そうすると、ほとんど意味がないのです。

○佐藤真琴委員 そうですね、消費税にもならない。

○事務局 いいことを言ってくれた。控除になりますよ。

○天野勇治委員 それがいいかもしれないです。

いい血統のものを残すために補助金を増やしてほしい、たまたま僕たちの話ですけれども。

○佐藤真琴委員 でも、それは最後まで、眼先で消費税分ぐらいカバーしますよというお金の出し方ではなくて、もうちよっと大きな枠で見たときに、ここに例えば30万円ぶっ込むと、これだけ最終的に規模感が上がるからこれだけもうかりますというような試算とかをいっぱいできる人たちが市役所にはいっ

ばいいるわけですよ、インテリジェンスな人たちが。もうちょっと何か。

○事務局 今言われたように、本当に補助のお金、例えば500万円とか700万円とか1,000万円のお金、畜産に出しているものを、そういう天野さんが言ったような、本当に薄まってしまってしょうがないよね、というものではない。もし、そのお金を使うならほかの使い方とかをみんなでもう一回考えるということから始めないと、ちょっと厳しいですね。

○佐藤真琴委員 厳しいですね、使い方とか。

○天野勇治委員 去年、その導入の補助金とプラスで、梅津さんが言われた受精卵の移植というものが初めてそういう形の補助金を僕たちが提案してつけていただいて、それがあって去年は非常にうまく行って、増額していただいて補正で通ったのです。だから、そのようなことも一応去年はやっています。

だから、去年は450万円ぐらいの補助金をいただいています。300万円プラス150万円。

ただ、件数が件数だけに、毎年それだけやはり入れ変わらない。だから、繁殖農家を増やすということが非常に難しいのです。増頭するような形のものに、増資。

○梅津浩史委員 だったら、ちょっと僕もよくわからないのだけれども、私は外車のタイヤを作っている会社なので、ブランドイメージはものすごく大事なのです。アドバンだからね。

○天野勇治委員 はい。

○梅津浩史委員 ということが、もし、これができるかどうかわからないけれども、今言われているように、天野さんは子牛から肉牛まで一括生産をするような形の経営方針を、それに対して。

○天野勇治委員 はい、分かります。そうして鳳来牛にしてしまえば、例えば。

○梅津浩史委員 それで、鳳来牛が何かにし

て、やはり品評会か何かにどんどん出していくような、そのための補助金をもらうなり何かをしていかないと、僕はずっと、今の話からすると、要は、こんなことを言うと、ある大企業がいて、その下に部品屋がいて、部品屋は部品を一生懸命するけれども、大企業は最後につくってしまって、もうかっているのはここだけだという話から抜け出せないと思う。

○天野勇治委員 下請業者ね。今のお話で、結局。

○梅津浩史委員 それで、先ほどの話も一緒に、ブランドをきちんとすれば、今度は引く手あまたにどんどん買いに来てくれると。

○天野勇治委員 すごく僕たちの売り上げは、例えば2,000万円の売り上げで、極端に言って1,000万円やっが残ったという世界なのです。

肉は、僕たちは産む前に種つけをして、生まれるまで1年かかって、出荷までに1年かかって、やっとお金になると。

今、梅津さんがおっしゃるように肥育までやるとそこからまた1年半かかるのです。

○梅津浩史委員 そうやって思うと、みんな、融資か何かでどっつくって。

○天野勇治委員 その額が余りにも、新しい牛舎を造るまでの資本がやはりないのです。

○梅津浩史委員 いや、だから、それはみんなが出資し合いながら、あとは先ほどの補助ではないけれども。

○天野勇治委員 それは、農協でもそのような話が一応出て、おまえたちで出さないと言ったから僕たちは出せない、農協がメインで僕たちが出資の1人だったら出せるけれどもと言ったら流れてしまったのですけれども、なかなかやはり繁殖農家ばかりで1つのものにしていくというのは難しいところがあったのです。

だから今みたいに、いいときは繁殖の方が効率がいいです。回転がいいから。

○梅津浩史委員 それはそうでしょうね。

○天野勇治委員 ただ、これで悪くなるから、今から若い子がやるころには、もう一貫の経営というのですけれども、そういうことをやった方がいいよということは、僕はこれからやる子には言っているのですけれども、なかなかやはり、いいときは人間。

○梅津浩史委員 僕もよくわからない。僕は豊島で、でかい。

○天野勇治委員 はい、わかります。知っています。

○梅津浩史委員 あれは補助か何かでつくったと聞いているので、そういうふうにはできないのかなと。

○天野勇治委員 もうないのですよ、そういうものが。あれは7割補助なのです。

○梅津浩史委員 何か補助をもらってと。

○天野勇治委員 僕もそれで増頭したのですけれども、そういうものが、県にも言っているのですけれども、そのようなものが市でやってくれば、この業界でもう少し大きくなる人が出てくるから、それは可能性としてはあるかもしれないです。

○梅津浩史委員 ここにあるように、どうやってもうけようかということを考えなければいけないから。

○佐藤真琴委員 そうですね。これ、困っていらっしゃる方は、作手にこの子牛の業者は何軒ぐらいあるのですか。

○天野勇治委員 作手は20軒もない、15軒かな。

○佐藤真琴委員 15軒作手にあって、15軒の皆さんが同じように困っていらっしゃるという、これは困りごとが15軒分ありますという意味なので、ここで言うところの、ずっと出てきているソーシャルビジネス、コミュニティビジネスというところのお話にはなりなってくるのです。

さっき書いていたのですけれども、事業性が高い、事業、ここはゼロだとして、こちら

に事業性が高くなっていて、こちらに公益性が高くなっていったときに、事業性はそこそこあるのだけれども公益性も高いですと言われるのが、この辺がソーシャルビジネスと言われるところなのですけれども。今、2年のものがさらに育てると1年半と長くなってしまいうけれども、そこだけ頑張ることができれば、ここは回りますということが本当に分ければ、15軒の家プラスふるさと納税のような感じでもいいですし、肉の会でもいいですし、何かそういうものに出資してもらって、ファンドを組んでみんなで回していくというようなところまで考えてみるだけでも、市とそういうものやってみると。次の仕掛けは生まれてきそうなのですから、そういう話はどうなのですか。農家の中ですということとはなかなか難しいのですかね、地元の農家ですということとは。

○天野勇治委員 今、買いに来てくれる人が非常に大事だから。

○佐藤真琴委員 子牛を買いに来てくれる人。

○天野勇治委員 産地としての、やはり。

○梅津浩史委員 それはあるでしょうね。

○天野勇治委員 そうなのです。今はそちらを残して、ただ、いずれは、多分そういうときが来るという話は。

○梅津浩史委員 だから、一方で売りながら、一方で、先ほど言われたように、どこかで何頭かずつでもいいから育てる。

○佐藤真琴委員 そうですね、次の種まきをやっけていかないと。

○梅津浩史委員 そう、そう。こちらはこちらで商売をしておかないと生きていけないと思うので。

○天野勇治委員 そういう方がもういるのです。それをやっている方が田原市に。

○梅津浩史委員 田原市に。

○天野勇治委員 ええ。やはり資本があつて。

○梅津浩史委員 だから、この前、帯広のやっていた話があつたではないですか。

○天野勇治委員 ええ。

○梅津浩史委員 あれもやはり金融機関からお金を借りてそうやってやったという、そしてブランドイメージをつくって行って、東京だとかどこかに売りに行ったという、それをやはりみんなで、今言われているように、大抵、作手だけではないと思うのです。新城市全部で話ができる、そういう場を市役所でつくってもらったり、何かしてもらって、ということはどうでしょうかね。

それで、やはり自分たちの問題。だから自治区になっているのだと思うのだけれども。

○佐藤真琴委員 天野さんはこういうところにも出てこられていろいろ考えて、次のことも動いて、お上と言われるところにも一生懸命行って、一生懸命にするではないですか。他の方と、同じようなお仕事をされている方とその未来の話というものはできるのですか。そういうことは余りみんなしない、聞かない。

○天野勇治委員 今、一生懸命教えています。

あと、みんな、僕より若いかな年寄りばかりで格差がひどいのです。

○事務局 上にいる、15軒では一番若いですよ。

○天野勇治委員 いや、そんなことはない。

○事務局 酪農も入れるということ、ごめんなさい。

○天野勇治委員 だから、ちょうど中間なものですから、そういう頭のない人が上でやっていて、たまたま後継者とか新規就農で入った子が一人いるのですけれども、そのちょうど真ん中なのです。

○佐藤真琴委員 そういう勉強会みたいなものをやったら効果的ですか。

○天野勇治委員 一応、ある程度、その部門の中ではやっているのですけれども、やはりなかなか現状の、とりあえず経営をまず安定させる方が。

○佐藤真琴委員 そうですよ。日々の食い扶持があってこそですよ。

○事務局 そういう勉強会ですよ。こういう勉強会ではなくて。

○天野勇治委員 そう、そう。それはやっているのです、ある程度。

○佐藤真琴委員 その次という。

○天野勇治委員 経営の方ではなくて、経営というか、その大きな動きの、自分のところの経営の、いかに牛をうまくみんなで売っていかうかというような動きのものが今の第一段階です。

○事務局 天野さんより若い人たちだったら、こういう考え方に変えていった方がいいと、今、佐藤さんがおっしゃったような考え方もみんなで考えていってみようかということも考えられますよね。

○天野勇治委員 要は、もう今の子には、今から建てるなら一貫で出来るようにした方が、そのかわり補助金がないと、自己資金ではやめると言ってます。

○梅津浩史委員 だから、先ほども言ったように、そういうものは、あそこの帯広ではないけれども金融へ、UFJとかどこからか回っていくようにしていけば。

○佐藤真琴委員 その勉強会は、ちなみにどのぐらいの頻度でやっているのですか。

○天野勇治委員 2カ月に1回。

○佐藤真琴委員 2カ月に1回のその頻度のところに、訪問調査に行っているような御用聞きに行くと言ったのですからきっと来てくれますよ。

○梅津浩史委員 そうですね。

○天野勇治委員 だから、先ほどの話で、農業の方は、多分、すっと集められると思うのです。だから、農業の方は加藤君もよく知っているから、来ると言ったら、農協という組織があるから、多分早いと思います。

○佐藤真琴委員 ですよ。

○事務局 農業課の人間に行かせます。

○天野勇治委員 いや、いい。農業課じゃなくて。

○佐藤真琴委員 何かもうちょっと経営とかそういうところですよ。ちょっと今の農業の経営というところからちょっと違う視野のところが入った方がいいような気がするのですけれども、どうですか。

だって、農業の人が、同じ人たちが同じことを話しても永遠に同じことしか出てこないで、ちょっと違うかなと。

○天野勇治委員 もうちょっと今出ていることは、この前、農協の常務に言ったのですけれども、作手は新規就農の方がやはり多いではないですか。そうすると、トマトをしている子がいたり、ハウレンソウの子がいたり、例えば、僕のところにも牛の子がいるとか、イチゴの子がいるとか、だから作手の中の、変な話、新規就農とか、例えば牛の関係の跡継ぎの子でもいいです。だから、次世代を担う人間ばかりを集めて、そこで話し合いを開いてくれと言った。そのときに、ぜひ加藤君とか行ってもらって聞いていただくと、例えば。

○事務局 本当に。

○天野勇治委員 多分。

そうしたら、常務が今度やりますと言ったから。

○事務局 加藤君も、なんて言っていない。

○天野勇治委員 それは言っていないけど。

そういうように、今言われたように違う業種の。

○佐藤真琴委員 そうですよ。

○天野勇治委員 だから、多分、作手の中でいくと、新規就農の方の問題点は、石田君がいたり、ここに出てくるから、そういうところをつくってくれと一応言っておいたから、逆にそのようなときも。

○事務局 でも、本当に私が思うに、先ほど佐藤さんが言われたように、異業種、梅津さんなんか、農業なんかやったことがないのに、やはり横浜ゴムなので、ブランドイメージだとか、もう下請の会社の話を出して、聞いて

もないのに一貫性でやった方がいいのではないのかと、当然そういう考えがぼんぼん出てくるので、おもしろいと思います。

やはり若い人たちが。

○天野勇治委員 全然分からないのに、こういう言葉が出てくるね。

○事務局 そうです。普通に出てきてしまうので、やはり民間の大きな会社の考え方だとか1回はどこかで聞いて、もしかしたら話をするだけで横浜ゴムの方がみんな肉を買ってくれるだとか。

○梅津浩史委員 いや、いや、肉を買うというか、売っているところを知らないのだけれど。

○事務局 そうですね。子牛は買ってこないかもしれないけど。

○佐藤真琴委員 インドではないのですから。

○天野勇治委員 ただ、せっかく新城高校があるので、あそこは農業、牛をやっているではないですか。うちの息子も乳牛の何かをやっていて、そういう若い人たちとも話をして、今の長男。

○天野勇治委員 ちょうど先週行ってきたところで、すごく力が入っている先生で、ちょうど先週、部会でやって、農協も一緒に行つてすごく喜んでくれまして、女の子とかすごく、今、農業課に来る子が多いらしいです。

だから、僕たちは視察もばんばん受けるからという話も、ちょうど、今、梅津さんがおっしゃるように。

○梅津浩史委員 だから、ちょうど本当にそういうことをやって、ブランドイメージもやっつけていけば。

○天野勇治委員 そして、何か残る子が増えてくれば、やりたい子とか。

○梅津浩史委員 そうですね。

○天野勇治委員 そのような話もちょうど先週行って。

○梅津浩史委員 あまりこういう話を聞くと、やめようかなという子が出てくると困るので。

○佐藤真琴委員 何か交換留学ができるというですね。今、農業高校がすごく流行なのです。何か漫画があって、それを見て。

○梅津浩史委員 銀の匙ですか。

○佐藤真琴委員 そう、何かそれですごく行く子が増えて、東京の農業高校とかもすごく人数が増えていて、でも、その子たちは結構フィールドがないので、学内と近くの酪農へ行っていますので、何かそういう子たちとインターンシップで夏休みとか、交換とか、何かそういうこともできますよね。

○梅津浩史委員 そうやって思うと、米もそうなのです。

○佐藤真琴委員 そうですよ。何かちょっとお客様を、もちろんその衛生の話とかもあると思うのである程度分かる人でないと難しいと思うのですけれども、遊びはなくて本気の人たちが新城の子牛と知ってくれていれば、その人たちがいつか消費者になるはずなので、子牛を買う消費者になるはずなのです。

○梅津浩史委員 そうですね。

○天野勇治委員 何かいい意味で、たまたま畜産でこの前行ったのですけれども、いい意味で農業に関して、今おっしゃったお米の話でも拾えるところがちょっとでもあればとか、接する機会になればと思って、この前。

○佐藤真琴委員 でも、これ、農業の人、先ほど加藤さんもおっしゃったのですけれども、農業の人たちだけではなくて、梅津さんもそうですけれども、経営コンサルまではいかないのですけれども、そういう人たちでももちろんいいのでしょうけれども、本当にやっつけらる方で経営をやっている人たちと話せるといいですよ。

○梅津浩史委員 僕もそう思います。

○天野勇治委員 常にやはりどこかにそういう幅を持った考えを持っておくという。

例えば、やらないにしても、常に違う視野で。

○梅津浩史委員 そういうものに市役所の方

からこんなことをやるのだけれどもいって相談に乗ってもらったりすればいいのかもしれない。

なかなかそれが、すぐにもうけにつながるかどうかは別としても、幅が広がると層が広がる、かなり。いろいろなものでもそうではないですか。小さいこんなケーキでもどこかがうまかったと言うと、どーっと幅が広がって行って、最後には。

○天野勇治委員 僕が、多分、思って若い子に言うより、梅津さんに来てもらって、突然ぽつと言われたら、余計にみんなびっくりして。

○梅津浩史委員 いや、僕だとだめ。

○天野勇治委員 その方が多分。

○梅津浩史委員 僕はタイヤしか作ったことがないので。

○天野勇治委員 同じ業種の人間に言ってもぱつとこないかもしれないけれども、違う業種の方から言われるとやはりすごく響くかもしれないです。

○佐藤真琴委員 全く違う所からも矢が来るような、そういう場所を作るということも、でも、そういうものこそ市役所とか得意なことなのではないですかね。

○梅津浩史委員 昔、1年に1回、労働講座のようなことをやっていたのですよね、市役所で。

○事務局 うん。

○梅津浩史委員 だから、そんなときにそういうことで若い人たちに、あれは経営コンサルみたいなのも来ていたしいろいろ来ていたので、そんなものを利用した方がいいかもしれない。

ただ、小難しい話になると。

○天野勇治委員 やめた方がいいですね。

○事務局 そうですね。

○梅津浩史委員 そう、そう。ざっくばらんがいいかどうか別として。

○天野勇治委員 セミナーになってしまうと

みんな来ないですよ。

○佐藤真琴委員　そうですね。では、ちょっと時間が、次、澤上さんの御意見をいただいてもいいですか。

○澤上花子委員　私の仕事は、やはり一日にできる仕事の内容が決まっているので、量が決まっているので、とにかく今は宣伝をしなくても来てくれるお客さんのケーキを作るだけで十分仕事はあるのですけれども、でも、やはり地元でまだ、ネット上ではだんだん広がってきてはいるけれども、地元の人にどこにあるのかなという、うわさは聞けけれども全然分からないというふうによく言われて、同じ、本当に隣の地区に住んでいる人にどこにそんなケーキ屋があるのかというふうに言われることが最近は多くて、だから、やはりそういう地域の人との関わりをもう少し持つように何か宣伝ができれば、もっと近くの人たちと交流が出来ていいのかなとは思ったりします。

とにかく、たくさん仕事を受けるというより、私は細く長くやって、今、一人でやっている、それで十分なのかなということは正直あります。

でも、やはりだんだん、道の駅で販売をするお菓子だったりとか、そういう商品がだんだん増えてきて、やはりそういうところにも力を入れていくためには、やはり一人ではもう限界なので、そこに従業員の人を雇って一緒にお菓子づくりをして、全て、やはり今、一人でラッピングをしたり包装するのも全て、全部考えてやっていると、やはりどうしてもそこまで気力が持たなくて、だから、その手助けをしてくれるような人と一緒に働ける人がいれば、やはり自分が稼げて広がっていくのかなと思うのですけれども、そこまでまだちょっと気力が無いというか、人を雇うところでその収入をどういうふうに、人件費を払っていったらいいか、人件費を払ってだめになってしまわないか、収入がなくて、もうそ

れで終わってしまったらと思うと、そこまで幅を広げる必要もないのかなと思ったり、正直そこが今迷っているところで、でも、やはりお菓子を作っていくと、もうこれは絶対商品にした方がいいよ、宣伝してあげるからという知り合いの人とかがいて、やはりそういうものを作って、本当は売ればいいのかと思って。今、店舗を構えていないので、やはり委託料がすごくかかるので、委託をすると本当に作った分の1割ぐらいしか自分の収入が得られないから、そうすると、結局作っている。個人でやっていることなので、収入も得られないし時間だけすごく費やしても、お金にならなかつたらやはりそこは自分の中でも折れてしまうので、自宅からやはり販売ができる形をとることが一番理想なのですが、と、いって、そこに買いに来てくれる商品なのかなと思うと、やはりお土産用に作って、店舗、置いてもらう場所を増やすとか、そういう形で何か、今はもっくるという所で1カ所しか置く場所がないので、自分で営業して「ここにも置いてください、あそこにも置いてください。」というふうにやっていくにはちょっとストップしてしまう部分があって、というところなんです。

だからすごく、今、すごく中途半端です、気持ちが。

売りたい商品はあるのに、そこからどうやって進んでいったらいいか分からなくて、では、それをどういう形で、もし、例えば、商品にするなら、やはり知識もないので、どういう箱詰めをしたらいいとか、売り物にするにはどういうパッケージにするのがいいのかとか、やはりそういう知識もやはり自分の中だけでしかないのです。

○梅津浩史委員　ちなみに、どちらにお住まいですか。

○澤上花子委員　長篠。鳳来の長篠です。

○梅津浩史委員　先ほどの、ちょっと聞いていて、2つあるのかなと、ふと思っただけで。

1つは、知ってもらいたいといったら。とすると、地域自治区の中のどこに入るかちょっと僕はわからない。長篠はどこにあるのですか。

○事務局 鳳来中部。

○梅津浩史委員 中部で、あそこは区長たちが集まっているはずでね。だから、そこへ宣伝の、これぐらいのものでいいと思うので、地図と何かがあって配れば、大体地域でまた回してくれる、回覧板か何か回してもらえば少しその部分は広がるのかなというのと、もう一つは、従業員を雇ってまでとは分からないのですが、移動販売を考えるとか。

それには、販売をする場所とかは、市で、どこなのか知らないけれども、ああいう、よくあるトラックではないけれども、ああいうもので売って回るというよりも、そんなことを。

そこはやはり市の行政なんかと話をしてということなのでしょうけれども、ただ、どれだけのものがつくれるのか、僕も、今、話だけで聞くと、この2つぐらいが、今、もしかするとアイデア的には、やって、もう、そこからうわさが広がってもうかってくれば、どんどん事業を拡大しようということになれば、あとは場所の提供だとかそういうものを、これは自分で経営者になるので。

○澤上花子委員 そうですね。

○梅津浩史委員 経営するって難しいですよね。

○澤上花子委員 そうなのですよ。

○梅津浩史委員 だから下手をすると、どこか、僕はよく分からないのだけれども、どこかのパン屋の人たち、というか、もしかするとあるかと思うので、パン業界なのか何か知らないけれども、いろいろ店があるではないですか、そこらの人たちと何か組合に入るか何か知らないけれども、そこでノウハウを教えてくださいませんか。

○澤上花子委員 そうですね。

○佐藤真琴委員 澤上さんの今の話をお聞きしていて、問題点がちょっと2層にあるのかなと思うのですけれども、そもそも澤上さん自身がこれからどうしていきたいのかということ、どうしたらいいのかなということの整理整頓がつかないなど。そのつかない理由は、やはり未来のことを相談する相手とか、それはお菓子がおいしいねとか、こうやったらどうということ、単発的に言う人ではなくて、やはり本当に相談に乗ってくれる人、同じぐらいの、自分と同じぐらいよりちょっと前にいるぐらいの、その大変さが分かる人、心を寄せて考えてくれるような人に相談したりして判断する基準を自分の中に持てたら、1つ解決、もうちょっとあるのかな。

でも、人材とか告知の話は、その心が決まってしまうと、別に、これは結構何でもなる話ではないですか。要は踏み出すか踏み出さないかを、判断がつかない状況なのかなとちょっと聞いていて思ったのですけれども、こういうことは、例えば、どのような支援という話なのですか、そういうことを話して、定期的に相談できるような場所とか窓口があったら使いたいと思いますか。

○澤上花子委員 そうですね。

○佐藤真琴委員 そういうものは新城市はあるのですか。

○事務局 あります。

○梅津浩史委員 どこにあるのですか。

○事務局 うちの窓口です。

○佐藤真琴委員 加藤さんには相談したくない。言えない、そんな思っているもみみたいな感じになっても。

○事務局 だけど、どちらかというと、お金を借りたいだとか規模を拡大したいという相談ではないですよ。

○佐藤真琴委員 違うのです。もっとそのずっと手前の話。

○梅津浩史委員 手前、手前。

○佐藤真琴委員 整理整頓して。

○事務局 伴走を一緒にしていってくれるような人ですよ。

○佐藤真琴委員 そう、そう。それで話を聞いて、これはそういうことですかとフィードバックして、ああ、みたい。

それで、かみ砕いたこと、これもお金の話だから、これは加藤さんかもねというような人がいるかどうか。

○事務局 ということが、話ができる人ということですよ。そういう人材を育てることが必要だと思います。

○佐藤真琴委員 いないということですか。

○梅津浩史委員 市役所には。

○事務局 市役所というか地域にもなかなか。

○佐藤真琴委員 でも、そういう窓口は、制度上は、一応、市役所だと加藤さんのところとか。

○梅津浩史委員 振興、そうだね。

○佐藤真琴委員 でも、商工会だと商工会に入らなければいけないから、年間1万円とか1万5,000円は結構な金額ではないですか。そうすると、なかなか。

○事務局 そういような人たちの、そういう人とのグループを作って傷のなめ合いではしょうがないね。

○佐藤真琴委員 そうなのです。だから、同じ人ではしょうがないです。みんなで困ったねとか言って。

○事務局 そういう中で、澤上さんが一歩出た人になれるようなふうにしていって、次に澤上さんのような人が出てきたときに、伴走していける。

○佐藤真琴委員 でも、澤上さんがそれをちょっと、あれですよ、おじさんですよ、考え方が。

○事務局 しょうがない、おじさんだもん。

○佐藤真琴委員 だめですよ、そんな開き直っては。

女性・若者支援と書いているくせに、だめですよ、加藤さんが開き直っては。探したっ

ていないですよ。

やるかやらないかを決めていいのですよ、やはり。規模感というものがあって。その相談に行くと、みんなすごく応援してしまうのですけれども、これ。やらないという選択肢も残して、この人の人生だから、この人が決めて、この人がやる。やらない人も尊重されないと、これ、チャレンジする人が出にくくなると私は思うのですけれども。

○澤上花子委員 本当はやりたいのだけれども、やはり今の収入、自分の中だけでやっている収入とか、その中で賄っていかなければいけないということを考えると、ちょっと躊躇してしまう。

○天野勇治委員 お聞きしたいのですけれども、今のお話だと店舗はないのですよね。

○澤上花子委員 店舗は。

○天野勇治委員 一応、家で。

○澤上花子委員 うん、調理場があって、ケーキの。それで、玄関先で、玄関先が一応店舗というようになっていて。

○天野勇治委員 だよ。

○澤上花子委員 はい。

○天野勇治委員 そうしたら、やはりお話を聞いていて、やってみないと、例えばやるのはできるかもしれないけれども、赤字を抱えてしまったときにすごく怖いから、試しショップというか、そういうものを、例えばもっくろにおろしているのではなくて、例えば市が斡旋して、例えばそういう。

○佐藤真琴委員 チャレンジ店舗というような感じで。

○天野勇治委員 うん。作ったらどうかと思って。そういうものを公募して、例えばもっくろの土日でやろうとか、ピアゴに例えば交渉して、ピアゴのどこかを借りて、何かすぐ始めてしまうと、もしかして失敗したときに困るから、そこで名前をつくる期間をお試しショップというか、今、チャレンジショップと言われたけれども、そういうものがない

と、すぐ始めても怖いですね。

○澤上花子委員 そうですね。

○天野勇治委員 それで、もうやるといって店を造ったら、例えば改装して。

○佐藤真琴委員 固定費をかけてしまっから、ですね。

○天野勇治委員 うん。だから、それよりもそういう場所を作ってあげる、例えば。

高島屋なんかで、名古屋でもそういうところがあるらしいのです。何かそういう。だから、そういうものを新城市の中で例えば市が斡旋して作って。

○梅津浩史委員 いや、斡旋というよりどこかに話をしてくれたりいいのです。

○天野勇治委員 そうですね、そういうところの。

○佐藤真琴委員 ピアゴの中に一画、市が借りてしまうとか。

○天野勇治委員 うん。

○梅津浩史委員 そうね。そこに。

○天野勇治委員 地元のショッピングセンター。

○梅津浩史委員 起業家の食品だとか、米はだめなのだろうね、JAがいるから。

○天野勇治委員 加工品とか、例えばそういう。

○佐藤真琴委員 子牛はだめですよ。

○天野勇治委員 でも、何かそういうふうに例えばやる人にはすごくいいかもしれないですね。

○梅津浩史委員 そうすることによって、今みたいな人たちが何人か集まって。

○天野勇治委員 そうですね。

○梅津浩史委員 あれば。

○天野勇治委員 スペースで、スペースを別にしてもとりあえずやってみるとか。

○梅津浩史委員 そういうことも1つの。

○事務局 まち中の地域で空き店舗とかも結構あるので、そこに駐車場が一緒についているようなところが。

○天野勇治委員 新城の。

○事務局 はい。

○天野勇治委員 だめ。そんなの、それはだめ。

○事務局 そういうところが、地域がそういうところを貸すというようなことなら。

○天野勇治委員 それが、その端になればいいけれど、ぽつんと1軒だけでは絶対だめです、やはり。

○佐藤真琴委員 ついでに買うのだったらマドレーヌは売れるけれども、あえてマドレーヌを1個買いに行かない。

○事務局 行かないでしょうね。

○天野勇治委員 だから、そういう例えば。

○佐藤真琴委員 ピアゴとかの方がいいということですね。

○天野勇治委員 そう、そう。

○佐藤真琴委員 回遊性があるところにその場所をつくって。

○天野勇治委員 例えば、そこが6店舗ぐらい、この通りの両側でとか、私は何かそういうものがあればいいかもしれない。

○梅津浩史委員 そういうことを入れると、この2番が生きてくるのです。

○事務局 ユーホームがたくさん、広い面積があいていますけれども。

○天野勇治委員 いいかもしれない。

○事務局 子牛も売れますよ。

○佐藤真琴委員 リボンをつけてしまいますか。

○事務局 何でも売れますよ、あんなに広がったら。

○佐藤真琴委員 ちょっと、今、あと5分ぐらいなので、あと2と3もちょっと簡単にいいですか、梅津さん、行ってしまっても大丈夫ですか。

○天野勇治委員 はい、いいですよ。

○佐藤真琴委員 今おっしゃっていただいたことから派生して2番と3番だと思うのですが、こういったものを広く生かして、

あれば利用したいと思うものはどのような産業。

○梅津浩史委員 産業というか。

○佐藤真琴委員 産業というか何かサービスとかでもいいと思いますけれども。

○梅津浩史委員 ちょっとずっと、新城市をずっと上から見ると、中心がないのです、中心が。

この前も、あるところでどこだ。新城市は何にも遊ぶ場、要は何かいろいろ、あそこへ行けば全てそろそろか何でもできるような中心の場所を1個作らないと、そこからバスだとか交通網をしなないと。

この前もSバスの話をしたけれども、全部、大体は市民病院なのです、中心が。新城市はやはり。そうすると病院へ行く人ばかりのことで、やはり作手の人が下りてきて、そこに映画館があったり何かしたり、若者が集まれる場所とか、何かそういうものを作っていく。

そのような中に、先ほど言ったようなタウンだとか何かにして。

○澤上花子委員 豊川のコロナみたいな、ああいう。

○梅津浩史委員 そう、そう。ああいうふうに。

○澤上花子委員 あそこみたいな雰囲気ですかね。

○梅津浩史委員 あそこはまだ足りないというふうには思うね。何かそうしないと、まず何か中心が始めに。その近くに市役所があったり郵便局があったりというものが、何かずっと考えていくと、そうすることによって活性化が少しでも出来るのか。

あともう一つは、自然だとか文化。だからエリア、エリアをちょっと作って、作手だと動物園があったりとか、何か理想を。

○澤上花子委員 テーマパークみたいな何かをね。

○梅津浩史委員 そう、そう。

○佐藤真琴委員 もうエリア構想から変えて

いかなければいけないという。

○梅津浩史委員 そうだと。

ぎょぎょランドなんか、豊川なんかはそうではないですか。

○澤上花子委員 そうですね。

○梅津浩史委員 ここにぎょぎょランドがあって、遊ぶ場所があって、こちらには若者用住宅だとか、豊川市が何か増えているのは何でだろうと思うと、そういうふうにあそこだけが人口が増えているというのです。豊橋市と新城市は減っているけれども。という話の中で、ずっとこれを考えていくと、あれば利用したくなるというようなものになっていく、これはみんなで話し合いをしなないと分からないですけれども。

○佐藤真琴委員 まちそのものが。

○梅津浩史委員 まちそのものがどう活性化をというか、一極集中がいいのかどうかはわからないですけれども、先ほど言ったようにエリアごとに何か作る、規制があったりすると無理なのかもしれないけれども。

○澤上花子委員 やはり今の子供とかでも、もう映画館がないし、新城市は。だから、豊川まで遊びに行くのが当たり前で、名古屋まで行ってしまうのが当たり前というふうにだんだんそうなるから。

○梅津浩史委員 何かここで止めたいなど。

○澤上花子委員 そうですね。向こうに出ていくのではなくて、ここで遊べる場所を何か作るといいかもしれないです。

○梅津浩史委員 ただ、そうは言っても例の高速バスがまた走るようになったではないですか。

○澤上花子委員 そうですね。

○梅津浩史委員 あれも使ってもらわないと困ると言われると、またちょっとあれなのだろうね。

○佐藤真琴委員 今はシネコンも外に出ているのですね。

○梅津浩史委員 だから、自然になると今度

は新東名ができたので、そういうエリアがあれば、そういうよそからも来るのかなとか、何かそういうふうにして、そうすると、ある意味、いろいろな産業がまた入ってきて、特に外食産業だとかも入ってくれば。

うちに昔、大谷大学があったときに、うち、市議会議員を1人出していたもので、いろいろ話を聞くと、大谷大学はなぜ、学生はいるのだけれども新城市に住まないかという、アルバイト先がないからだ。

今、御存じのように苦学生が多いので、アルバイトをする場所がないと、若い人がやはりアパートを造っても住まないです。

○澤上花子委員 そうですね。

○梅津浩史委員 そういう意味でも、少しそういう産業、コンビニなり、ある意味、都会的な見方をすると、なぜ都会にあんなに人がいるのだというふうに見えるし、何かそういうものと、あと、僕はよく分からないのですけれども、新城市は住んでいる人と仕事に来る人の人数が相当変わるでしょう。昼間の人数と、新城は。

○事務局 変わります、変わります。

○梅津浩史委員 東京もそうなのですから。

○事務局 東京とかもそうだよ。東京も外からわさっと来ている。

○梅津浩史委員 遠くから通うぐらいだったら新城市に住みたいと思うようにできれば、全てがうまくいくわけではないと思うけれども、将来的に。

結構、車が混みますから。

○天野勇治委員 横浜ゴム自体がそうですね。

○梅津浩史委員 うちもそうだ。

○事務局 7割ぐらい、6割ぐらいでしたっけ、外から来ている人は。

○梅津浩史委員 今は6割です。

○事務局 夜間人口と昼間人口を比べたら、夜間人口の方が多いいのではないかな。

○梅津浩史委員 まだ多いのですかね。

○事務局 多いと思います。

○梅津浩史委員 それならまだまだ救いようがある。

○事務局 やはり豊川、豊橋方面に通勤している方がかなり、いっぱい向こうから入ってくるイメージはあるのですけれども、やはり出ていく人が。

○梅津浩史委員 だったらなおさらその人たちを逃がさないようにどうするかをこの場で考える。

だから観光、俺がよく言われたことは、新城市はやはり観光とそういう中でのことだろうというのが。

○鈴木誠協議会長 では、そろそろ。

○佐藤真琴委員 はい。

○梅津浩史委員 済みません、ちょっと長く話して。

○佐藤真琴委員 とんでもないです。

では、外から入ってくる人ももちろん増やしたいけれども、中にいる人たちが中で遊べるというか中できちんと暮らせるようなまちづくり。

○梅津浩史委員 まちづくりをもう少し真剣に考えた方がいいのではないかな。

○事務局 全てに繋がっていくのですよね。

○梅津浩史委員 繋がっていくよね。農業もそれによって、農家でそのままられる人が出てくると思うし。

○事務局 住みにくいのですよね。

○天野勇治委員 何が住みにくいのか。

○事務局 分からないです。住んでいる人間では分からないです。

○梅津浩史委員 だから、何で入ってこないのかなという。

○事務局 そこが弱いところで、住みにくいのですよねと言われても。

○天野勇治委員 何が住みにくいのか。

○事務局 何にも外から来ている人だとか出ていった人に聞いていない。

○梅津浩史委員 アンケートをしていないからね。

○事務局 アンケートはやはり大概ですよ。自分のことは適当にしか答えません。

○天野勇治委員 住む環境は、例えば、ショッピングセンターがなくても住みやすければみんないますものね。

○佐藤真琴委員 そうですね。

○天野勇治委員 極端に言えば。何か違いますよね。

○事務局 そうだと思います。

○天野勇治委員 だよ。でも、いいところだから住みたいと思えば残りますよね。

○佐藤真琴委員 住んでいる人が、住んでいる人の幸福度が高ければ本当は住みやすいのだけれども、それが周りから見たら新城市は住みにくいねと言われていたのだとしたら、ここが通じていないということですよ。

中の人たちが思っている住みたい、住みやすいいいところという気持ちと、外の人たちにそれがきちんと伝わっていないという。

それは観光何とか課というところの仕事ですか。

○天野勇治委員 作手の、住んでいて住みにくいと言われるのが別にいいと思っているのと同じです。

○事務局 いい形のところで終わりですよ。次に繋がっていきますので、今のところ。それを考えるのが大事ですよと、今日分かったので良かったです。

○佐藤真琴委員 良かった、そういうふうに言っていただいて。

○事務局 そういうものが大事だと分かったので、次からそこにがんがん入っていけるように。

○佐藤真琴委員 住んでいる人の満足度は高いのですか、ちなみに。

○梅津浩史委員 だと思います。

○佐藤真琴委員 それは調査をしているのですか。

○事務局 市民満足度調査のようなものを行っているのですけれども、あそこに座っている人がいるところで。

抽出でやっているだけなので、来た人が。

○天野勇治委員 市役所の職員へ、市外に住んでいる方は何で市外に住んでいるのかと一回アンケートをとったらどうなの。そちらのほうが僕は先にやった方がいいように感じる。

○事務局 わかりました。では、いい感じで。

○天野勇治委員 ありがとうございます。

○佐藤真琴委員 ありがとうございます。

○鈴木誠協議会長 では、それぞれ佐藤さんと松本さんから少し概略を紹介してもらえますか。

○佐藤真琴委員 これは何か。

○鈴木誠協議会長 次への課題というものがあつたら。

○佐藤真琴委員 どうしたらいいものやら。

○鈴木誠協議会長 次に向けてちょっとこんなことをやらなければいけないぞという、そういう提案をしてもらいましょうか。

○事務局 今日、課題として挙げられていることが、考える必要があることとか分かっただけでもありがたかったからですから、ありがとうございます。

○佐藤真琴委員 いつも極論で済みません。

○事務局 いえ、いえ。

○鈴木誠協議会長 僕、結構いろいろなものを発明したのです。絵の具を実は開発したことがあるのです。材料は生卵。生卵にお酢と、それから実はちょっと鉄を混ぜて、それ、高校のときぐらいかな。それで絵を描くと、そうすると、生卵の黄身の部分が、黄身の部分というものが固まるのです。固まって透明になるのです。透明、しばらくするとひび割れてくる、乾燥するから。そうすると、そのひびのところに鉄分がうまくくっついて、まるで花が咲いたようになるのです。そこに塗料をちょっと入れるだけで、鉄がその塗料の粉

を、これまた塗料は水ではだめで、塗料の粉を引きつけて、本当に花が咲くような。それを開発して、特許庁に出したらどうだと言われたのです。ところが、1週間たって分かったことがあって、ハエが集まってくる。

○佐藤真琴委員 卵ですから。

○鈴木誠協議会長 卵が臭くて、それを何とか、冬しかだめで。それで絵を描いてタイに出したことがある。タイのそういう絵画展が好きだったので、風景画で。そうしたら、タイは暑いところでしょう。そこで僕の絵のところだけハエがいっぱいとまって、それで分かったという。

それで、その企画は全然商品化されなくて、実は大手のところは何かならないかと相談してきた、そういうことが大好きなのです。

○澤上花子委員 そういう何か作ることが好きだったのですか。

○鈴木誠協議会長 そう、そう。いっぱいあります。

○澤上花子委員 すごい。

○鈴木誠協議会長 無駄なことばかり。

○澤上花子委員 でも、特許は何千件が無駄で、その1個が、とかとよく言いますよね。

○鈴木誠協議会長 1つも実にならなかった。

○澤上花子委員 これから何か出てくる。

○佐藤真琴委員 そんなに先生、おもしろかったんだと学生がびっくりするという。

○鈴木誠協議会長 研究室で、昔の挑戦した商品もどきがいっぱいあるのですけれども、それからあれ、牛を飼っているでしょう。

○天野勇治委員 はい。

○鈴木誠協議会長 ヤギの乳でチーズが作れるのですけれども人気がないのです。

○天野勇治委員 臭いのですよね。

○鈴木誠協議会長 臭い。ヤギの乳でチーズを作ってみたのです。そうしたら、もう臭いすごい。あの臭いを何とかすれば、そうすれば低カロリー、低脂肪のすごくおいしいものができるのだけれども、バターにすること

も出来るのだけれども、今、国産バターが非常に少なくなっているのです。

○天野勇治委員 ヤギは青い草をそのまま食べるのです。僕たちの牛は乾燥の草を食べさせるのです。やはり食べる物が違うからあのに臭いになるのでしょうか。

○鈴木誠協議会長 ところがね。

○天野勇治委員 消えますか。

○鈴木誠協議会長 消える。

○天野勇治委員 本当ですか。

○鈴木誠協議会長 青い草に猫の、犬ではなくて猫の餌を粉々にして、それで青い草とそいつを乾燥させてわらの状態、わらは水分を吸うので、それに猫の餌の粉をまぜると、そうすると栄養価が高くてヤギがよく食べるのです。1カ月ぐらいすると便の色が緑から茶色になって、臭いが、乳の臭いが変わるのです。それを中学3年生のときに隣の飼っているヤギでやったら、そうしたらえらい怒られて、乳がそのうち出なくなってきたのです。

○澤上花子委員 やはり何でもやることですね。一步踏み出さないと何になるか分からない。

○鈴木誠協議会長 でも、余り褒められたことはないかな。

○事務局 ヨーロッパにヤギのチーズがあります。

○鈴木誠協議会長 ありますか。

○梅津浩史委員 あるでしょう。

○事務局 何か聞いたことあるな。

○鈴木誠協議会長 スペインがありますね。あちらのヤギはちょっと品種が違うらしいです。

○事務局 品種が違うのか。

○鈴木誠協議会長 やはり考える人はどこでもいるのだなと。

どうですか、スイーツをつくる時に利用したら。

○澤上花子委員 ヤギの乳を。そのものを飲んだことがないので、どんな味がするのです

か。それはそれで飲める、臭いがなく。

○鈴木誠協議会長 全然飲めますよ、

○澤上花子委員 発酵させるとそういうものの臭いに変化してしまう。

○鈴木誠協議会長 そうです。発酵過程で変えるのです。

さあ、そろそろやりましょう。

どうぞこちらに。済みません、放ったらかしにして。

○澤上花子委員 出来ないではなくて、やらないと分からないですね、何でも。躊躇していたらだめですね。

○天野勇治委員 ヤギの乳ですけど、まずくて、それから牛乳が飲めなくなって。

○澤上花子委員 そうなの。

○天野勇治委員 今でもそう。

(松本班討論開始)

○松本吉生委員 では、よろしくお願ひします。

新城らしさを生かし、産業として稼ぐ力をつけるにはということなのですけれども、新城らしさというものをもう一回整理しなければいけないのかなというふうに思ったのですが、いかがでしょう。

どうでしょう。皆さんの御意見。

○石田靖典委員 僕もこれをずっと考えていたのですけれども、新城らしさというものを、一応外から来た人間ですので、住んでもう3年目なのですけれども、いろいろなものはあるのですけれども、らしさというものを聞かれると難しいな。これというものはちょっとないなということはあるのです。

○松本吉生委員 やはり自然とか歴史とかそういうことになるのですかね。どうなのでしょう。そこになかなか産業として結びつけていくのは結構難しいなと思うのですが。

○河合恵元委員 面積の85%とか90%なのかちょっとわからないのだけれども。

○松本吉生委員 山林ですか。

○河合恵元委員 山林が、とにかく人工林が多い。これは資源ですので、資源はやはり有効活用するべきだと思います。

○松本吉生委員 資源として有効活用。

○村松 東委員 新城らしさという言葉、ちょっと今日は最初に出られなくて申し訳なかった、説明を多分していただいていたと思うのですけれども、メールをいただいています、そこにこの3つの市民自治、地域自治、産業自治というものを、3つを軸にしてやっていくことが新城らしさだという提案でよかったでしたか。

○事務局 うちの課長が御説明しましたのも。

○村松 東委員 いやいや、例えば自然が多いとか資源が豊富だというそういうイメージの言葉のらしさと。

○松本吉生委員 なるほど、そうですね。

○村松 東委員 どちらの意味での新城らしさ。

○事務局 新城らしさを他の市にはないものというふうに考えると、こういったまちづくりのための仕組みが、しっかりとしたものが3本、今、産業自治を検討しておるのですけれども、市民自治という、こういう市民が参加する仕組み、地域が課題を、自分たちで、地域の人たちが考えて解決していこうという仕組みがもう条例としてここで平成25年からやっていますので4年目になる、丸3年過ぎているという、そういう状況でありますので、こういったまちづくりの3つの自治というものが確立、産業自治はこれから確立するのですけれども、この3つで自治を進めていくというものは他の市にはほとんどないので、この3本がきれいに入っているものはないので、それを新城らしさと置きかえてというふうに。

○松本吉生委員 そうということ。

○事務局 ええ。

○石田靖典委員 では、これということですか。

ね。これを生かすための産業とは何ですかという。

○事務局 そうですね。ということで、まちづくり、産業自治の仕組みの説明をさせていただいたということでございます。

○松本吉生委員 それで言うと、いや、僕、3つのこの軸は近くないというか、それぞれが確立されてそれぞれが軸になっているので分り易いなどということはあったのですけれども。例えば、市民自治で若者とか女性がこれは困っている、ああしたい、こうしたいとずっと悩んでいたりするではないですか。何かないかなと考えていたりするではないですか。でも、もしかしたら産業界で、我々みたいなところであれば、それを、困っていることを聞いたら、いやいや、こんな簡単にそれは解決できるみたいなことが結構あるのではないかなと思ったのです。

もしくは、若者がいろいろ考えているのだけれども、地域の人からすれば、いやいや若者よ、そんなにいろいろ言うけれども、それではだめだろうみたいなこともあるかもしれないし、もしかして地域で困っていることが若者とか女性だったら解決で出来るかもしれない、産業だったら解決出来るかもしれないことがあるので、例えば、産業としてと言われたら困るのだけれども、それぞれのところで出た意見というものをぜひ融合というか、横に、この新城らしさがすごい、串を刺して欲しいなという、そうすると何か、こんな簡単に出来るのにみたいなものを、ずっと悩んでいることがなくなるかもしれないしということをちょっと思いました。

ごめんなさい、その産業として、産業自治のところでは稼ぐ力をつけるにはということで、それとはちょっと離れてしまったのですけれども、何か横に通していただけると、いろいろ解決策とかが見えてくるのかなというふうにちょっと思いました。

○石田靖典委員 そうですね。

○河合恵元委員 産業と、これはこれでいいのですよね。

○事務局 はい。

○河合恵元委員 これはこれでいいと思います。新城らしさ、産業に対する新城らしさを話すのだよね。

○松本吉生委員 今のお話だとそうですね。

○河合恵元委員 そうだよな。

○松本吉生委員 うん。

○村松 東委員 でも2つありそうですね、今の話だと。こういう仕組みですよという新城らしさ、こういう産業が新城らしさという。

○事務局 こういったものを生かしてというふうに僕は考えたのですけれども。

○河合恵元委員 では、産業自治の観点から考えればいいのですね。

○事務局 そうです。

○河合恵元委員 これを、この3つがどうのこうのとか、これは新城市の1つの方向性ですね。今、こういう3自治で新城市をつくっていきこうという動きがあるよと、条例で決まっているよと、その中で産業自治振興協議会、このグループは産業に1つ特化して稼ぐ力、これなのだよね、きっと。これを話し合ったらいいの。

○事務局 こういった形で。

○河合恵元委員 この1番、2番、3番。

○事務局 4回目、5回目のお話で稼ぐ力をつけて、地域内でもお金を使う。外でももちろん使いたいから使う。それは、その使うということはいいいのだけれども、自分の稼ぐ力をつけていくにはどうしたらいいのかと。

今、稼いでいる方ももちろんいらっしゃるけれども、プラスアルファとしていくにはどういったものが要るのだろう、どういった連携が必要なのだろうということをお話していただくと1番になってくるのかなと。

○松本吉生委員 なるほどね。

○事務局 ええ。

○石田靖典委員 1番でしたら、今、僕たち

は、農家ですと、大体、農繁期になるとパートさんが必要になってくるのです。ただ、パートさんの募集をかけてもなかなか集まらないし、その農繁期が終わってしまうとパートさんが要らなくなってしまうというようなことがあるので、人材派遣ではないのですけれども、その忙しいところに回せることが出来れば、会社ではないですけれどもそういう組織があればいいなということがよく言われることです。

農協もそれをやるように、今、動いてはいますけれども、まだまだちょっと足りないなというところがあるぐらいです。

あとは、これもトマト農家でよく言われることなのですけれども、廃棄分のトマトがかなり多いのです。常に言われることが、加工して売るといった形をしたらいいのではないかというふうに選果場のおばちゃんとかからも結構言われるのですけれども、トマト農家は、夏は忙しくて、そのことをやっている余裕がないので、そういうところで。

○松本吉生委員 もったいないですね。

○石田靖典委員 はい。会社とか、他のところでやってもらえるところがあるのだったらいいなということはありません。

○河合恵元委員 捌き切れないということですね。

○石田靖典委員 市場に流せないようなトマトがいっぱい出てくるので。

○河合恵元委員 形とか。

○石田靖典委員 形、あとは穴があいていたりとか。味的には問題はないのですけれども、やはり見た目が悪いというだけで。

○村松 東委員 アウトレット的なところですね。

○石田靖典委員 そうですね。

○事務局 もったいないですね。

○石田靖典委員 はい。

○松本吉生委員 でも、そういうものはあると思いますので、欲しい人というのはもしか

したらいるのかしれないし、それが、市が中心になって、それこそそういうものから作ったドレッシングとかトマトジュースみたいなもので何か逆手にとってブランドにしてしまおうとか。分かりませんけれども。

リユース野菜みたいに。

○石田靖典委員 あとはブランド化。

○松本吉生委員 ですね。

○石田靖典委員 一応、農協もブランド化で動いてはいるのですけれども、やはりアピール力不足とか、そういうことがあるので、そういうところを押して、導いてくれるような人がいるのだったらありがたいなという。

○松本吉生委員 例えば、アピールということであれば、分からないですけれども我々のところで商談会とか全国でやったりしますので、そういうものを何か連携させていただいたりとか、ということはあるのかもしれないですね。

○石田靖典委員 それはすごいですね。

一応、経済連とかもスーパーとかでアピールしているらしいのですけれども、それだったらちょっと足りないなという気はしています。

○河合恵元委員 話が変わってしまうかもしれないけれど、何かネットワークができて、うちは今余っているから要らないとか言って、うちまで持ってきてとか。

○石田靖典委員 契約上、農協に全量出荷になっている。農協を通して加工用の施設なり会社なりがあれば、そこに全量を納めるとか。

○松本吉生委員 なるほど。青森のリンゴ農家が、なっているものは出しますよと、落ちたものは今までリンゴジュースにしかなかったのですけれども、その落ちたものを、今、皮をむいてカットリンゴで、今、コンビニとかに置いてあるではないですか、あれをやったら、それで、要はリンゴが茶色にならない何かに漬けているのかもわからないですけれども、それをやり出したら、落ちている

リンゴのほうが高く売れるようになった、むしろ。

それで、今はもうリンゴをむかないで、コンビニに行ってカットリンゴを買うようにみんながなっているのではという、もしかしたら何かそういうような何かがあるのかもしれないですよ。

○石田靖典委員 そうですね。トマトのその穴があいているところだけ切つてしまえば普通に食べられるので、それでさいの目にでも切つてしまえばわかりませんから。

○松本吉生委員 わからないですけどね。その何ができるか、ちょっと済みません、全然アイデアはないんですけども。

そういうものもあるのですよね、最近だと。

どうですか。お医者さんとしてでも支援や連携はなかなか難しいですよ。

○村松 東委員 なかなか。いろいろ考えるのですけれども難しいですね。難しいというか産業というところは、ちょっと医療が離れている。

○松本吉生委員 そうですよ。稼ぐというとまたかなり難しいですよ。

○村松 東委員 そう感じる、その言葉にすごく抵抗がありますけれども、働く方々が根づいていただくためにはやはり医療は大事なことだと思うので、これからはやはり高齢化がどうしても進んでいくものですから、市もしっかりというか一応プランがあつて、今、やっているのです。地域包括ケアシステムというものがあつて、なるべく在宅でいきたいなという。

○松本吉生委員 それは先生たちが訪問していくということなのですか。

○村松 東委員 訪問、往診される先生もいるし、訪問看護というものがあつたりとか、疲れた人たちが入院できるようにそういう病床をつくるとかいろいろ、地域包括ケアは日本全国で今やっているのです。

まだ新城は田舎なのでそんなに困らないか

もしれないのですけれども、東京は大問題になっている、ですので、そういうところで、そういう部分は医療、これから大変かなとか、そういうことをやっていかないと人がいなくなってしまうでしょうし。

それはどうしても支援・連携とかとはちょっと余り関係がない、稼ぐという概念としてはちょっと違うところになるので、医療は半分、ちょっとボランティア的なところがどうしてもあるものですから、考え方として。

○松本吉生委員 それでも、例えばそういった施設を行政が結構承認してくれれば、例えば先生が答えるということ。

○村松 東委員 なるほど。

○松本吉生委員 例えば市の皆さんからすると遠いところにじいちゃん、ばあちゃんを預けるより、やはり近くのほうがいいですよ。

○村松 東委員 いろいろ、今、高齢者介護つき住宅とかいろいろな施設も出来上がっては確かにいますね。

○松本吉生委員 そうですよ。

○村松 東委員 田舎だと人が結構、みんな同居しているから、都市に比べれば多いので、そこまでの、東京ほどの需要がないのかなとも思います。在宅というのは、逆にどこかに預けるのではなくて、家で見るという形の方が理に適っているのかもしれないです。

そうすると、開業医が若返らないとか。マンパワーが要るものですから。

だから、訪問看護というのはすごく充実するといいなといつも思います。

今やっているのですけれども、数が少ないので。

○松本吉生委員 そうなのですか。

○村松 東委員 産業に直接は難しいのですけれども。

○松本吉生委員 新城市はやはり、まだ核家族になっていなくて、やはり大家族が多くて。

○村松 東委員 多いと思います。

○松本吉生委員　じいちゃん、ばあちゃんをお家で見ての方が多いいいことですか。

○村松　東委員　そうです。若い人は若い人で単身というか単家族が多いですけども、年寄りには意外とやはり、皆さんお家の、ひとり暮らしは少ないですね。ひとり暮らしも、高齢者二人暮らしはまだ少ない方だと思うんですけども。

○石田靖典委員　作手だと出ていった人が入ってくる率が高いみたいです。

○村松　東委員　どこがですか。

○石田靖典委員　作手。

○村松　東委員　帰ってくるということですか。

○石田靖典委員　はい。1回出て行って、その後、また帰ってくるという。

○松本吉生委員　それは会社を引退した後ということですか、当然。

○石田靖典委員　いえ、会社を辞めて帰ってくるとか。

○松本吉生委員　辞めて帰ってくるの。

○石田靖典委員　はい。

○河合恵元委員　何をしているの、その人たちは。

○石田靖典委員　何をしているのですかね。

僕もよく分からないですけども、ただ、一緒に研修を受けた子が作手の出身なんですけれども、会社を辞めて作手に帰ってきて、まだ働いていて、その人の話を聞くと、「多分みんな帰ってくるよ。」と、「外は嫌だ。」と言っている。

確かに同居ではないですけども家族はやはり多いですね。大家族という訳ではないですけども、本当にじいちゃん、ばあちゃん、子供がいてというような家が大部分多く見られるような気がします。

○松本吉生委員　何かありますか。

○河合恵元委員　産業としては、やはり稼ぐというか、先ほどもちょっと言ったんですけども地域資産、資源をどうやって使うかと

いうことを考えました。

○松本吉生委員　例えば、木材とかそういう感じですね。

○河合恵元委員　木材ですね。

この前、熊本で震災があったときの報道とかニュースの中で、仮設住宅がやはり木材版とかいうのが地元の建築組合なのか向こうの、九州の人たちが力を出してそういう木造の仮設住宅を、1, 0 0 0棟だったかちょっと忘れちゃったけれども、造ったと。

それで、施工も早いらしいのです、どうも。

○村松　東委員　木材。

○河合恵元委員　木材も。そういう技術を持ったのか積み木ハウスのなのか、極端に言うとなんでも組み立てられるような。でも、仮設なのだけれども人に優しいとか、それを見ていて、材料はいっぱいあるので、新城市がとか、組合なのか一事業体では難しいので、1, 0 0 0棟とか2, 0 0 0棟とかいつでも配れるよと、新城市の材で。ストックするのか、ほかの県とか市と契約するのとかか、新東名が出来たことで一早く届けますよとか。

そうすると、建築屋の人も簡単に出来る工法でいつでも飛んでいけるとか、木を何かできないかなど。

一般住宅でももちろん木材を使っている人もいると思うけれども、圧倒的に材はあるので。

○村松　東委員　そうですね。

○河合恵元委員　まだまだ、外材も入ってくるし、なかなか手をこまねいていても。もう80年になる木なんてざらにありますから。

○村松　東委員　そうですね。

○河合恵元委員　あまり買ってくれないような木だから。

だから、何か市が契約してもらって、でも、加工は民間がやって、ストック場というものが必要になると思いますけれども、そんなものは何とかなりますので。

できればそれが進んでいくと、海外の被災のところにもいつでも提供できますとか、家

のない人たちはいっぱいいるので、海外と姉妹都市提携をしながらとか、新城市の材なのか東三河の材なのか、物を売る。

○松本吉生委員 海外に。

○河合恵元委員 海外に。ODAとして、物として売るのが、という展開が出来ると楽しいかなと。

○松本吉生委員 そうですね。

○河合恵元委員 燃やすのも一つの手かもしれないけれども。

○石田靖典委員 そうですね、農業の分野でもどこだったか忘れましたが、ビニールハウスを木で作って、というのがあったのです。

○村松 東委員 ビニールハウスを木で作ったの。

○松本吉生委員 骨を。

○石田靖典委員 骨です。

○河合恵元委員 今の技術では出来るかもしれないですね。

○石田靖典委員 はい、骨を木でつくって、パイプで作るより高くつくらしいのですけれども、ただ、軽くて環境もいいというふうになっていました。

あとは、最近だと木材をバイオマスですか、燃料にしてハウス全体を温めるというやり方もあるので、そうすれば林業と農業が結びつくことが出来るというのがあります。

重油代とかが浮くのだったら、僕たちも冬に何か作物を作るということも考えることが出来ると思うので。

何せ冬の農業は、やはり、特に山間地ですけども、燃料代がかなりネックになってしまうので何もできないということがあります。作っても赤字になるという。

○松本吉生委員 例えば、先ほどおっしゃっていただいたトマト、廃棄用のトマトがもったいないとかいう話、何かに使えないかとかいう話、パートさんが必要な時期とそうではない時期があるので、それをどうしたらいい

とか、例えば木材、先ほどの災害の連携とか海外との連携といういろいろなアイデアはあると思うのですが、どのような支援・連携があればそれが実現していくのかということが、1つはそこだと思うのです。

当然、市役所に頼るといってもあると思うのですが、そこは何なのでしょうかね。

僕たちは物を売るという話だと、我々とする銀行のネットワークがあるので、たまたま新城市では全国展開、はたまた世界となると我々だけなので、そういったお客様のネットワークを生かすとか結ばせていただくというようなものはあると思うのですが、あとは何かあるかですよ。

○石田靖典委員 どちらかというとプロジェクトのような形で、僕が言ったようなものをやりたいといったときに、市なり農協なりが先導していく上で、そこに必要な業種の人間が集まってこのプロジェクトをやっていくにはどうしたらいいかという形で話を進めてもらえるといいような気がするのですが、

多分、僕だけがこういうものをやりたいですと言った場合。

○松本吉生委員 例えば、お金をもらっても人材が。

○石田靖典委員 結局、人脈がないので、うんとなってしまう。

○松本吉生委員 そういうものも何かあれでしょうね。いろいろ連携していないとだめだということですよ。

○石田靖典委員 はい。

○松本吉生委員 難しいですね、どのような支援。

結局、人・物・金ということなのでしょうかね。

○河合恵元委員 そうですね。

○松本吉生委員 結局その3つがそろわないと、ということですよ。

○石田靖典委員 はい。

○松本吉生委員 例えば、人が集まらないとかいうお話もありましたしね。

○石田靖典委員 はい。そういう集まりがあるようなところがあればありがたいなど。話し合いの機会のようなものがあればありがたいということはあります。

○松本吉生委員 わからないですけども、新城ニュービジネス大賞みたいな、そういうものをまず募集してみるとか。

それに発案してくれて、割といろいろな人たちが、例えば産業の人たちが見ていて、よくあるじゃないですか、手を挙げるやつ。はい私、芸能プロダクションとかよくあるじゃないですか、歌を歌うまい子に、ではうちが契約しますみたいな、何かそういう、ちょっと話が違ってしまふかもしれないですけども、例えばそういう、うちがお手伝いしますよ、みたいな。ごめんなさい。

○事務局 いや、おもしろいです。すごくおもしろくて。

○村松 東委員 新城で今でもやっていませんでしたっけ。市長が。

○松本吉生委員 商工会とかでやっていらっしゃいますか。何かそういう、分からないですけども。

○村松 東委員 他のプロジェクトを公募して3人ぐらいが、何か前にやっていませんでしたか。

○石田靖典委員 ああ、鈴木君がやったやつか。地域おこし隊の。

○村松 東委員 鳳来の。

○河合恵元委員 「めざまち」ではないの。

○事務局 どやばい村ですか。

○村松 東委員 じゃなくて、それはまた別の違うやつかな。

○事務局 じゃなくてまた別ですか。

○村松 東委員 鳳来の大野の鳳来館でしたっけ、やっている人は誰でしたっけ。

○事務局 安形真さん。

○村松 東委員 あの人が関わっている何かプロジェクトを何かいろいろやっているのがありますか。新城市でたしか、やっていま

せんでしたっけ。ブログで見ただけなのですけれども。

○石田靖典委員 前に、でも何かそういうアイデアを募集しているというのはどこかで。

○村松 東委員 何か合宿をやってみんなでプロジェクトをつくって提案して、選ばれたら何かになるというようなことを最近どこかで見た覚えはあるのです。

だから、似たようなことを、何かこういうプロジェクトがあって、手を挙げてみたいなのをやっているのかなと思って。

そういうところと、こういう、ここと今やっているようなことは結構かぶることがあるのかなとも思うのです。

○松本吉生委員 そうですね。

○村松 東委員 片や新しいプロジェクトを立ち上げて新城市を良くしようという人たちですよ、安形さんたちは。

○事務局 はい、そうです。

○村松 東委員 同じことをやっていませんか。

○事務局 ああ。

○村松 東委員 と思うのですけれども。

○河合恵元委員 何か今は予算が全て、

○事務局 目指せ明日のまちづくり。

○河合恵元委員 全部、予算組みから計画まで全部作らなければいけないと。

○村松 東委員 なってますね。

○河合恵元委員 それで提出して、受かるか受からないか。それを、案を、こんな案を買わないかという話だと思うので、自分ではそこま出来ないけれども、行政が絡んではいけないとか事務局は絡んではいけない。

大きなものから小さいものまで、いろいろなことがあるので、こんなビジネスを考えているのだけれどもと。

○松本吉生委員 そうですね。それを今、多分、いろいろ考えられた方が、それを実現するために行政へ行っていろいろ許可とかもらうとか、例えば、銀行へ行ってお金を借り

行くとか、何かの情報を取りに行くというようにそれぞれやっているのですけれども、それが何かまとめて、先ほどの話ではないですけれども、いろいろな人が新城市に集まって、一気に何か進むというような。

それは、今までは新しいものをつくる人というのが一個一個自分でやっていたのだけれども、それをみんなでまとめて聞いてあげて。

それは当然、だめですよとぼっさりどんどん行くのですけれども、ほとんど、多分だめだと思うので。

でも、その中でできらりと光るものには一気に、やってあげるといような。

分からないです。そこで三菱東京UFJ賞で500万円みたいな、冗談ですけれども。

○河合恵元委員 今ちょっと、ジャイカの方と勉強をちょっとしているのですけれども、そういうことはありますよね。何をどうやったらいいか分からない。

○松本吉生委員 そうですよ。

○河合恵元委員 そう。それはやはり支援をしてくれて、もちろん予算もつけてくれたりするのだけれども、実際、最後には儲ける商売をします。

1つはもちろん新城を生かした限定版なのだろうけれども。

○松本吉生委員 ちょっと、その新城らしさとかいう、さらにちょっと、もうちょっと川上の話かもしれないですけれども、今のは。

それが産業、自然、文化、人などを活かしたものであれば。でも、やってみましょうとかならないですか。

まちづくり事業交付金という、何か相当いろいろなものを固めた上でないと。

○事務局 そうですね。

○松本吉生委員 そりゃそうですね。

○事務局 ええ。

○松本吉生委員 ただであげるわけにはいかないですよ。

○事務局 そういうふうにはうまくなればいいですけれども、税金ゆえというところがやはり。

○松本吉生委員 そうですよ。

○事務局 なのですね。

○河合恵元委員 個人でできることは個人でやればよいということですよ。

○事務局 はい。

○河合恵元委員 その辺の棲み分けが。

○松本吉生委員 もしかしたら、そういう何か形として、産業としてということの以前に、そういうアイデアが出やすいとか実現しやすい仕組みづくりというものを何か。

○事務局 考えたほうが、自治。

○松本吉生委員 産業自治のところであげるといものが、そうすると、市民の方とか地域の方からいろいろなアイデアが出るという可能性もありますよね。

我々として何か出来るということも当然そうなのですけれども。

済みません、ちょっと何か議論が拡散してしまって申しわけございません。

難しいですね。アイデアはあると。

○石田靖典委員 今、一瞬、産業をつくると言われて、そういえばこのシーズンだと草刈りとか、あとは用水路の掃除とかがあるので、そういう会社があれば、その地域自治の方へ話が行って、地域自治区の方で、ちょっとうちのほうでお願いしますという形でお金を回せるのではないかとことをちょっと今考えたのです。

いかんせん、作手の方だとやはり地域を保つために自分たちで草刈りもすれば柵を作ったりとか、あとはどこか壊れたら自分たちで直したりとかしている、そういうものを代行ではないですけれども、やってくれるような組織があればありがたいなということ、今、一瞬思いついただけで。

○河合恵元委員 それが何かシルバー、うちで言うとシルバー人材。

○事務局 シルバー人材。
○河合恵元委員 高いんだよね。
○松本吉生委員 そうですね。
○河合恵元委員 何か制約されたりとか。
○石田靖典委員 はい。
○事務局 今は1つしかないという状況でしょう。そのシルバーさんが多いです。
○河合恵元委員 多いのだ。
○事務局 多いです。
○河合恵元委員 待っているの、仕事を。もったいないね。
○事務局 上手ですしね。
○石田靖典委員 よく働きますし。
○河合恵元委員 じゃあ、8時から、10時に休憩して。
○石田靖典委員 全部決まっていますよね。
○河合恵元委員 そういうことが嫌らしいのだよね、何か。
○石田靖典委員 あと、1つのところに何時間しかいられないとか、確か決まっていたはずなので。
○河合恵元委員 草刈りだったら、朝、年配の人だったら朝5時、4時に起きるから、もう涼しいうちにやりたいから。
○松本吉生委員 そうですね。
○石田靖典委員 もう朝4時から草刈り機の音がしています。
○河合恵元委員 言っても、シルバーだと8時からでないだめだというような何かの縛りがあったり。
○松本吉生委員 例えば、早く終わらせたいという人もいるけれども、もうこの時間は休憩というような、そんなことがあるのでしょ
うね、多分。
○河合恵元委員 大ざっぱに、1週間のうちにやってくれればいいのに、涼しいうちにやってくれればいいよなんていう、もうちょっとラフ的なことがあれば。
○松本吉生委員 そうですね。
○河合恵元委員 人材が。

○松本吉生委員 人材派遣会社を作りますか。
○石田靖典委員 欲しいですね、人材派遣会社は。みんな人手が不足しているので。
○河合恵元委員 そういうことが余り聞こえてこないね、でも。工業はもちろん少ないのだけれども、人手がないのだけれども、農業とか。
○石田靖典委員 一応、募集の広告は出しているのですけれども、なかなか応募が来ないという。
○河合恵元委員 結構1つのところではなくて、この月は作手の農家に行くよとか、何か楽しいような気がするけど。
○松本吉生委員 そうですね、何かね。
○石田靖典委員 夏は作手の農家で、冬は三ヶ日の方へ行ってとか。
○松本吉生委員 涼しくて。
○事務局 何かありますよね。
○松本吉生委員 確かに。
○石田靖典委員 暑いですよ。
○松本吉生委員 暑いですか。涼しくないのですか。
○石田靖典委員 涼しくないです。夜は涼しいですけれども。
○河合恵元委員 三ヶ日の方もそんなことやっているもんね。
○石田靖典委員 やっています。
○事務局 上手ですよ。人を集めるのも上手だし。
○松本吉生委員 あれは何か人が立っていてみんなが拾っていくということは、あれは本当なのですか。ミカン農家を手伝いに行くのは何かみんな立っていて、アルバイトのような。
○石田靖典委員 作手だとバスが来て、それにみんな乗り合いで。
○松本吉生委員 それで拾っていくのですか。
○石田靖典委員 はい。
○河合恵元委員 それは面白いね。
○松本吉生委員 山谷のあれみたいですね。

手配師みたいな。

○事務局 行くよというような感じですね。

○松本吉生委員 そうですね。

○石田靖典委員 あとは本当にあれです。農家でも午前中だけ欲しいとか、午後は要らないとかあるので。でも、パートさんとしては午前も午後も働きたいとなったときに、1つの農家と契約するのではなくて、人材派遣会社のようなものがあれば、午前はこっちで午後はこっちね、とは言えるとは思っているので、1人で午前はこっちの農家、午後はこっちの農家で契約しようということは面倒くさいとは思っているので。

○松本吉生委員 いろいろな課題とかニーズが、やはりいろいろところで転がっているので、それを調整していけばもっと何かあれができるということなのですかね。

○石田靖典委員 はい。働きたいと思っている人はいると思うのですけれども、募集している場所を知らないとか、こういうふうに農家が欲しいと言っているということを知らないということがあると思うのです。

○河合恵元委員 広告を出すといってもお金が要るしね。

○松本吉生委員 そうですね。

○石田靖典委員 あと、農協は、作手のトマトの場合は、農協がまとめて広告を出しているのですけれども、作手地域と、この間、豊田とか岡崎の山間地は広告を撒いたのですけれども、新城の下のほうまでは撒いていないと言うのです。

○河合恵元委員 撒いてないの。

○石田靖典委員 あそこのセブンイレブンのあたりまでしか撒かないと言っていたので。作手から下ってきたところのセブンイレブンのあの辺までしか撒かないと、そこから先を撒けと思うのですけれども。

○河合恵元委員 限られている人だと。

○石田靖典委員 そこから先だろうとは思っているのですけれども、そこまでしか撒いていない

と言うのです。

あとは、個人的に契約している人はいろいろなところから引っ張ってきているみたいですけれども、伝手がない人は農協が紹介してくれる人を待っているという。

本当に人手があれば規模を拡大したいという人は結構いるので、規模を拡大すればお金を稼げるようになって、また新たに人を確保できるようになって、新城市にもお金が落ちていくという。

規模を拡大していけばブランド化も容易になって、単価も上がってということもあるのですけれども、いかんせん、初めに人手がどこも足りていない。

○松本吉生委員 足りていない。人がやはりいないですね。

やはり家を建てる場所を増やさないとだめですよ。なかなか都市計画がうまく進んでいないですよ。そこになっちゃいますけれども。また都市計画の話になってしまいますけれども。

○河合恵元委員 一回、全部白紙にしてください。

○事務局 この前もそのお話がありまして、タイミングよく、今、ごめんなさい、行政からの話で申しわけないのですけれども、家が建つようにというお話がありまして、実を言いますと、都市計画課で庁内、行政の各課の職員を集めて、税務課だとか私も出たのですけれども、そこで、この前の会議の後にあつたのです。宅地の方はどうするかというふうなことは意見として欲しいということだったので、宅地として、新東名のインターも出来ましたので、宅地を少しでも広げられるように出来ないかということは打診してありました。

ただ、そこで国の話が出てしまったのですけれども、国の方は市街地の中でも、要は空洞化になってしまっているのです、そこをまず埋めていくという方式、そういう流れらしく

て、調整区域を広げていくのではなくて、今ある市街化区域の空いているところに入っていきように、要は小さく小さくというか、いう国の流れはあるようなのです、国として。流れとして。

ただし、新城市としてこういう方向で行きたいというところは都市計画課の方でまとめていくというお話でしたので、声を大にしていきたいなとは思っております。

もう一つ、今現在、都市計画課の方では、例えば市が宅地化しました、入ってもらえますか、要は住宅用地の需要はどれぐらいあるのか、入っていただける意向があるのかという、今、調査をしているそうなのです。今年で。

例えば、市は住宅の用地を確保しましたけれども、入る人がいなかったら。

○河合恵元委員 市が何でもやろうとするからおかしくなる。それは民間に任せればいいの。このエリアは住宅を建てますよと。

○事務局 建てていいですよという区域を。

○河合恵元委員 建てられますよというだけでいい。

○松本吉生委員 そうですね。

○河合恵元委員 宅地も全部用意して、さあ来てください、入らなかったらどうしようとすぐ考えるでしょう。

○事務局 すぐ考えてしまいます。

○河合恵元委員 やめればいいのです。調整を外せばいいのだから。このエリアを、新城市は、例えば新城小学校の生徒が少ないから新城小学校エリアを住宅エリアにしようかと、調整区域が邪魔だねと。

○松本吉生委員 そうですね。

○河合恵元委員 なかなか、いろいろなしがらみの人たちがいる中で新しい人が入っていくことは難しいから、新しいまちをつくる。

○事務局 人が集まる用地。

○松本吉生委員 そうですね。

○河合恵元委員 ゾーニングすればいいんだ

って。

○松本吉生委員 多分、そうすると、家を建てなくて持っている、宅地になると税金が上がるから。

○事務局 上がります。

○松本吉生委員 結局、使っていない人は多分売るのでよね。

○事務局 売りますね。

○松本吉生委員 売りたいと言うと。そうすると建築屋か不動産屋かわからないですけれども、宅地分譲をするかというような話を多分考えると思うし。

○事務局 そういう動きが出てくれば少しは。

○松本吉生委員 そういう動きが出てくればうちも絡みながら。宅地分譲のための土地を取得するための資金を支援するのか、分からないですけれども建物を建てるための住宅ローンでお手伝いするのか分からないですけれども、多分、自動的にそうなりますよね。

○河合恵元委員 用地が少ないから高騰するだろうし、みんな困っていないから余り売らないのよね。

○事務局 そうだね。

また会議がありますので、やはり皆さんの意見は貴重で心強いものですから。

○河合恵元委員 都市計画課はそれでもいいけどね。

○松本吉生委員 もうあと5分。

難しいですね。要はいろいろニーズ、課題はいろいろなところで落ちていると思うので、やはりそれを実現してあげる仕組みを作るとか、それを調整するようなことができれば何かもっと稼げるようになるのではないかなということが大まかな話ですかね。

今、そういうようなことがないからそれぞれの人がそれぞれで困ってしまっているというように。

○事務局 そこまでになってしまっているのですよね。

○松本吉生委員 そうですね。どうしたらいい

いかなと自分でいろいろ考えてはいるのだけれども、結局、解決策が見い出せないままでいるという、そんな感じですかね。

○事務局 結構おもしろい、ニュービジネス大賞みたいな、奇抜で、人材バンク制度というものも本当に欲しいという。

○石田靖典委員 欲しいです。

○事務局 ということがすごく伝わりましたし。

○河合恵元委員 仕組みなのかな。

○松本吉生委員 そうなのですかね。

先ほどの人材で言うと、僕は震災のときに仙台にいたのです、ちょうど。土日、当然、東京には帰れないので、しょうがないからと言ってはいけませんが、ボランティアをやるかというような、家にいるし、どうせ、というような。それだったら地域のためにという行って、どういうふうにやったかという、皆さん御存じだと思うのですが、ボランティアをやりたいですと、何をやるのか分からないけれどもとりあえず行って、土さらいをやってくれる人、はい、と手を挙げて、連れて行ってというような。家の片づけをやってくれる人とかで、はい、という感じで。そうやってやっていたのです。

○事務局 コーディネーターみたいな。

○松本吉生委員 だから、先ほどの話ではないですけども、それを、一応、一定期間雇ってどうにかしようとする、何かいろいろな縛りが多くてなかなか活用できなくてというようになってくるので、本当にそのような。

○石田靖典委員 そうですね。サラリーマンでも土日が空いている人だったら、私たちは土日働いていますからいつでも構わないですから。

○松本吉生委員 そうですね。かもしれないです。

○石田靖典委員 はい。

○河合恵元委員 ブラジル人とか。

○石田靖典委員 何でもいいです。

○河合恵元委員 僕は友達がいるけれど、すぐ集まるよ。

○石田靖典委員 そうなのですか。

○河合恵元委員 大根とりとか。

○松本吉生委員 そうですよ。

○河合恵元委員 そう。

○石田靖典委員 収穫してもらっている今のパートさんも、平日も、下手をすると土日も来てもらうので、やはりそのパートさんも結構厳しいような感じなので、土日だけまた別の人を雇うとか。

○河合恵元委員 そういうことは結構あるよ。派遣みたいなことは。1回、集めてくれと言われて50人集まった。

○松本吉生委員 すぐ集まるのですか。

○河合恵元委員 そう、そう。すぐ集めた。

○松本吉生委員 外国の方ですか。

○河合恵元委員 外国の人。

○石田靖典委員 こちらとしては、やってくれるのだったら別にどういう方でもいいので。

○河合恵元委員 そりゃそうだよ。

○石田靖典委員 はい。なので、そういうことをやってくれるような組織が、こちらからこういう仕事を頼みたいのですけれどもと言ったときにすぐに対応してくれるような組織があるとすごくありがたい。

○河合恵元委員 来週の土曜日、土日にちょっと5人ずつ集めてと、それならすぐに集まる、本当に。

○事務局 そのノウハウをちょっとお伺いして。

○石田靖典委員 ノウハウも何もないですよ。

○事務局 教えてもらって、どこに頼めばいいとか教えてもらえると、何か解決しそうな勢いがあるのですけれども。

○松本吉生委員 そういう人は、例えば自動車関係の期間工のようなものに登録している。

○河合恵元委員 派遣で契約している人たちです。やはりお金が欲しい。

○松本吉生委員 そうでしょうね。

○河合恵元委員　そして休んでいるのがもっ
たいないとか。半日でもそれはうれしいの
ではないかな。

○石田靖典委員　半日も働いてくれたら、そ
の分こちらも休めますから。

○松本吉生委員　そうですね。

○河合恵元委員　その方だけは、すぐ僕が手
配しますよ。

○事務局　話が早そうですね。

○松本吉生委員　カワイ製作所に少しマー
ジンを落ちて。

○石田靖典委員　多分、そういうものを欲し
がっている人はたくさんいると思います。

○河合恵元委員　もしかしたら、プロだから、
派遣する会社は。それはおもしろいかもしれ
ない。

○松本吉生委員　そうですね。でも、そうい
った余力を作ってあげれば、新しい、先ほど
のジュースの話も、そういう何かもうちょっ
と違うこと、休むということも当然ですけれ
ども、次の一手につながるかもしれないです
よね。

○石田靖典委員　そうですね。余力ができれば
また別のことが出来るようになるので。

この時期、トマト農家はみんなこうですか
ら。

○松本吉生委員　一番大変ですよ。

○石田靖典委員　はい。みんなトマト以外の
ことは何もできないとなっているので。

○松本吉生委員　夏はトマトですよ。冬は
どうしているのですか。

○石田靖典委員　冬はみんなそれぞれ適当で
す。片づけをやったりとか。

○松本吉生委員　でも、ハウスだからあれで
すよね。路地で育てているのですか。

○石田靖典委員　いや、ハウスです。

○松本吉生委員　そうすると1年中採れるの
ですか、一応。

○石田靖典委員　暖房をたかないとだめです。
だから、暖房をたくとなると燃料代でちょっ

と赤字になってしまうので、大体、作手の場
合は12月でやめてしまうという形です。

○河合恵元委員　作手のトマトはいいの。

○石田靖典委員　いいのかどうか。

○河合恵元委員　評価。

○石田靖典委員　評価はまだマイナーです。
大体、出しているのが愛知県内というか、行
っても豊橋とか。

○河合恵元委員　例えば、津具のトマトは結
構有名じゃない。

○松本吉生委員　有名ですね。

○河合恵元委員　あそこと比較して、酸っぱ
いものが好き、甘いものが好き、という人も
いるかもしれないけれども、分からないです
けれども。

○石田靖典委員　津具のトマトは、多分、こ
の辺のトマトは全部あれです、奥三河トマト
で出していると思うので。

○松本吉生委員　一緒なのですか。

○石田靖典委員　つくで高原のトマトで出し
ているのかな、作手は。

○河合恵元委員　そんな名前があるね。

○石田靖典委員　はい。津具のトマトはちょ
っと分からないです。単価的には聞いていて
も余り変わらないような気がします。

○河合恵元委員　やはりその問題点が農協だ
けではなくて、もうちょっとほかで情報があ
れば、たまたま僕はその話、そんなことはす
ぐできるよと、先ほどの。もうちょっと広い
ね。

○松本吉生委員　そうですね。

○河合恵元委員　いろいろところで多分そ
んな話がある。

○松本吉生委員　あるんでしょうね。そうい
うものを何か横で刺せるというか、いろい
ろな情報があったら、例えば、カワイ製作所だ
ったらすぐそれを解決できるとか、村松さん
だったら何かすぐ解決、もしかしたらうちの
会社だったらすぐできるのにというような話
はいっぱい転がっているかもしれないですね。

○河合恵元委員 うん。

○石田靖典委員 相談できるところが限られてしまっているという状況ができ上がってしまっている、今は。結局、そこに相談して話が止まってしまうということが現状です。

○河合恵元委員 出来たね、何か仕事が、新しいビジネスが。

○松本吉生委員 どうしましょう。人材バンクをやりますか。社長に出資していただいて。

○河合恵元委員 何か出来そうだよね。

○松本吉生委員 でも、本当に出来そうな解決を何か。市役所に半分出資してもらって、カワイ製作所に半分出資してもらって、雇われ社長で。

何かそういった意味では、余り堅く考え過ぎず、何かいろいろな意見が言えて、それをいろいろな人が見られて、何かできるというようなものがあつたらいいですね。

○事務局 こういう会はいいですよね。

○村松 東委員 こういう会議が、みんなが、やりたい人が集まれる場があればいいのかもしれない。

○事務局 何か新しい課題が出て解決するような、こういうものがあつて。

○石田靖典委員 ここでこういうふうにつながってはいませんが、実際はつながる場所がないという、場がないということが。

○河合恵元委員 だから行政に相談しても終わってしまう、その中で、その中だけで。そこから広げられない。

○松本吉生委員 昔はよくスーパーとかに、これを売りますとかこれを買いたいですとかあつたではないですか。

○事務局 張って。

○松本吉生委員 よくあつたではないですか。何かそういうものかも分からないです。市の中で何かこうやって誰かが見れば。

それとあと定期的に、例えば、選ばれた人たちが見るようにして何か解決策を書いて。

○事務局 そういう会ですよ。

○松本吉生委員 会というか。

○石田靖典委員 会でもホームページでもいい。ホームページに掲示板でもあつて。

○松本吉生委員 簡単に張って、こうしたらどうですかというような。

○事務局 ホームページみたいな、掲示板みたいな。

○松本吉生委員 掲示板みたいなものかも分からないです。何かそういう。

○河合恵元委員 それはビジネスになるんだね。内容と相談でしょう。

○松本吉生委員 市となると何かオフィシャルな答えが必要になってしまうかもしれないですけれども。

何か、ラーメン屋をやりたいですというような人がいるのではないですか。いろいろな有名なラーメン店の人がそれではだめだとか言って、その人が鍛え上げられて有名店になっていくというような、何かそんなイメージですよ。

難しいな。何か柔らか過ぎて誰でも気軽に言え過ぎるとまたそれはそれでちょっとしつちやかめっちゃかになってしまうということが難しいですけれども。ただ、余り堅過ぎても。

○石田靖典委員 そうですね。

○河合恵元委員 確かに、困っているところに何か、というのがビジネスだから。

○松本吉生委員 はい。

○河合恵元委員 そういう情報が欲しい。

○松本吉生委員 そうですよ。

○河合恵元委員 逆に欲しい。

○松本吉生委員 そうですよ。稼ぐチャンスですよ。

○石田靖典委員 情報と人脈を増やせる場所が欲しいです。

○松本吉生委員 どういう仕組みをするのかですけれども。

○河合恵元委員 北海道の何ていう人だったっけ。講演してくれたでしょう。

○事務局 岩橋さん。

○河合恵元委員 今、そのような流れにはなっていないのですか。

行政がやると面倒くさいものだから、金融機関がやっちゃって。

○松本吉生委員 金融機関もなかなか面倒ですけれども。

○河合恵元委員 会長でしょう、今。何かの会長じゃないの。

○松本吉生委員 金融協会。

○河合恵元委員 そう、金融協会の。

○松本吉生委員 商工会にしませんか。

○河合恵元委員 その方がいいかもしれない。

○松本吉生委員 メンバーになってくれればいろいろ経営指導とかもしますよ、みたいな話ですからね。

○河合恵元委員 何か課を作ればいいかもしれない。窓口だけという話、商工会は利用しながら、こういう人を紹介するとか集まるといことは出来るし。

○松本吉生委員 そうですね。だから、実務をやっている人がもっと気軽に話ができるような形がいいかもしれないですけれども。

一番簡単なものはネット上とか、あんなものですかね、分からないですけれども。

それで、それを何かいろいろひも解いてマッチングをして、片一方はニーズがあって、片一方は手伝って、そこでビジネスが生まれるから、そこでちゃりんともらおうというような仕組み作りがあると。

○石田靖典委員 そうですね。

○松本吉生委員 ビジネスになってお金をちゃりんともらえばいいのですよね。

○石田靖典委員 はい。

とりあえず話し合いの場が欲しいかな。

○松本吉生委員 そうですね。

お医者さんはやはり難しいですね。

○村松 東委員 そうですね。特殊になってしまいますかね。

○松本吉生委員 特殊ですね。

その産業を育てる人をどのように育てたらいいでしょうか。

○鈴木誠協議会長 そろそろ終わらしましょう。

○松本吉生委員 戻るの。

○事務局 はい。では、そのまま戻ってください。

○鈴木誠協議会長 では、松本さんから今日の話し合いの成果と今後もやはりこの協議会で取り上げないといけないというような、そんな話題をちょっと出してもらいたいと思うので、今、佐藤さんがまとめてくださいますので。

○松本吉生委員 はい。

○鈴木誠協議会長 ちょっと待ってくださいね。みんな集まるから。もう手短かにやっていきたいと思しますので。

(審議委員会に戻り、会長によるまとめ)

○鈴木誠協議会長 どうもありがとうございました。

きょうのテーマに沿った非常にユニークな話し合いが随分あったようで、僕もオブザーバーとしてだけ、関ってはいけなかったのですけれども、ついつい、ん、と身を乗り出してしまって、後でちょっと個人的に話をしたいなという人も何人かいましたけれども、そのような、いろいろないい機会になりました。ありがとうございました。

それでは、最初に佐藤さんの方から、今日、このグループで話し合われた内容の紹介と合わせて、この協議会で次なる課題はどういうことだということを、これを皆さんに手短かに紹介をしてもらいたいと思います。

詳しいことはテープに録ってありますので、また早目にテープ起こしをして、皆さんに確認をしてもらって、きちんと次なるテーマにしていきたいと思います。

では、お願いします。

○佐藤真琴委員 こちらの班は、農業をやっ

ていらっしやる天野さんとケーキとか焼き菓子作りをやっていたら澤上さんの事例で話を進めました。

天野さんの農業の話ですけれども、最初はブランド力を強くしていくとか、東で、みんな、この地域で寄せ集まってここを強くしていくという話が出てきたのですけれども、それとはまた別の軸で、マーケットシェアを拡大していくために、今の事業はもちろん大事なだけけれども、もうちょっと未来のことも考えなければいけないね、という話が出てきて。子牛を育てて、子牛を次のところに売るといふ仕事をされているのですけれども、今はいいので一生懸命やってしまうのだけれども、これからは子牛をきちんと肉になるところまで育てるところまでやらなければいけないと天野さんは気づいているけれども、なかなかそこまで周りがついて来ていなくて、天野さんが一生懸命、次世代の人に教えているような状況。そういう若い人たちの次世代の勉強会に、例えば梅津さんみたいに経営のところで本当に物を作って売っているような方たち、異業種の方を含めて次世代のための勉強会をやってみることも、おもしろいのではないかという話が出ました。

澤上さんについては、今、一生懸命、お一人でされているのですけれども、今の経営からもう一歩乗り越えていいかどうか、次はどうしたらいいのか、失敗してしまうか、やっっていけるか、判断が自分の中でまだつかないので、その自分自身のことをきちんと相談してくれるような、話を聞いてくれるメンターのような方が必要ではないかという話が出ました。

それを元に澤上さんが判断して、やるのだったら経営相談として、それは、今、既存の市役所窓口とか行けるのですけれども、もうちょっとその前の段階で、人の支援が必要なのではないかという話が出ました。

お二方とも必要なものは、つい支援とか連

携という仕組みで考えてしまって、こういう補助金とか、こういうサービスとか出てくるのですけれども、一番必要なのは人なのかなということが1番目のところの話で出ました。

2番目は、どのような産業かということを考えてときに、新城市は中心がないという話が出て。今人が集うエリアで中心になっているものが市民病院のエリアとか、そこからアクセスが出るような形になっているので、もうちょっとまちづくりを全体から考え直して、人が集う中心エリアというものがあって、その周りにいろいろなものがあるということが、そういうものはどうなのかということと。あとは、今、新城市で遊べる場所がないので、名古屋とか豊川まで出ていってしまうので、もうちょっと新城市で遊べる場所を。今、地域に学生、大学生がいてもアルバイトをする場所も無くて、結局、アルバイトができないと、その地域に大学生は住めないで、大学生が住みにくいと。外から入ってくる人も大事なだけけれども、中で暮らせるまちづくりがひとつ必要だという話を。

私、すごく大事なことを飛ばしてしまいました。

1番のところ、先ほどの澤上さんの自分たちでチャレンジしているけれども、店舗にイニシャルコストをかけていいかどうか分からないというような方たちのために、市役所が、例えばですけれども、ピアゴみたいな回遊できるスペースの中にチャレンジする人の場所を借りて、そこでとりあえずやってみるという、一歩目がやりやすくなるような場所づくりというお手伝いがしていただけないだろうかという案は出ました。

もとの話に戻りますけれども、2番目、3番目のメニュー、そもそも新城市は住みにくいという話が前提になっていますけれども、新城市は本当にそもそも住みにくいのかどうかという話になりまして、新城市に住んでい

る人たちからすると、新城市は別にそんな不便ではない、いいよ、とって満足度も比較的高そうなのですけれども、外の人から見ると新城市は住みにくいという前提になってしまうのはおかしいと、ここに住んでいる人たちが新城市に対して満足である、ここはいいところだと思っていることが外にきちんと伝わっていないという課題が1つ出てきて、そこは今後、本当に満足度調査であるとか、アンケートではなくてきちんとヒアリングをしてまとめたものが新城市の魅力として外に伝わっていけばいいなという話になりました。

以上です。

○鈴木誠協議会長 とてもたくさんいいヒントがあったので、もう一々まとめないですけれども、最後のアンケートではなくて、やはりきちんと聞いて、それでどこがいいのか、どういいのか、そのよさをもっと伝えていける方法があるのだと、そういうことをきちんとやはり情報を作って、共有して発信していくということが大事だと思います。

ありがとうございました。

今のAチームのところはどうですか。何か補足というか。いいですか。

天野さん、よろしいですか。

○天野勇治委員 いいです。

○鈴木誠協議会長 では、松本さん、お願いします。

○松本吉生委員 B班です。今、佐藤さんと先生からもありましたけれども、やはり情報の共有とかそういうものが一番重要かなという話がありました。

この1、2、3にあるような「稼げる」とか「実現する」という話もそうだったのですけれども、もうちょっと川上のような話になりまして、意外とニーズや課題はそこらじゅうに転がっているのかなと。例えば、何かやりたいけれども人が足りないから出来ないとか、もしくは、ちょっと今は忙し過ぎて、余力、時間が生まれないので、新しいことにチ

ャレンジ出来ないとか、いろいろ皆さんが思っているところは、実はたくさんそこらじゅうに転がっていて、そのニーズ、課題というものを整理する仕組みがもしかしたらないのかなと。

そのニーズや課題についても、例えば、自分一人で悩んで、例えば、申し訳ないですけれども、行政に相談しに行くということではなかなか解決できないのだけれども、それが、例えば他の産業の方とか他の方にちょっと聞くと、「いや、それはすぐ解決できるよ。」というような話が結構たくさんあったりするのではないかなという話が出ました。

ですので、いろいろなニーズや課題、要はそういった情報があるのだけれども、それらの情報を調整する仕組みとか人というものがあれば解決ができるのではないかと。課題やニーズを解決するということは、そこにビジネスが生まれているはずなので、そこでやはり稼げるのではないかなという話がありました。

もう一つは、例えばニーズや課題を自分が持っていて、いろいろ個別で相談しに行くと、例えば、何かの許可をもらうのであれば、行政に行って許可をもらったりとか、お金が足りなければ銀行、信用金庫に行って相談するとか、情報がなければ相談はするのだけれども、やはり自分一人でやっているとなかなかいろいろな幅広い情報が集まらないということで、例えば、そういうふうに一人が個別でやるのではなくて、それをみんなで集まってそれを一気に解決してあげるような仕組みが出来たらいいのではないかと話をしてしました。

ですので、個別の、例えばこういったものがあるので、こういったことで活用できたらいいなという話もあったのですけれども、ちょっとその前のような、川上のような話で、いろいろなニーズや情報があるので、それを調整する仕組みをしっかりと作っていけば、新

城市内でいろいろ新しいビジネスが生まれたり、例えば、外からいろいろお金を引っ張ってくるようなことが出来るのではないかという話をしました。

以上です。

○鈴木誠協議会長 ちょっと、今、松本さんはすごくきれいにまとめられたのですが、話を聞いていたらもっとおもしろい話をたくさんしていたような気がして、というのは、「はい」と言って、UFJが500万円投資しますという話を。

○松本吉生委員 よく歌手になりたい人が前で歌って、いろいろな事務所が、〇〇プロダクションとかがその人を採用します、どこそこが採用します、という番組がありましたけれども。例えば、皆さんがいろいろな知恵とかアイデアを持っていますので、そういうものを何か発表して、分からないですけれどもいろいろな産業界、金融界、いろいろあると思うのですが、その人たちがわっと出て、それはこうしたらいい、ああしたらいいよというふうになにかすぐに解決してあげるような仕組みができたらいいなという話です。そこで、わからないですけれども、カワイ製作所がそこに1,000万円投資しますとか。

○佐藤真琴委員 交渉してもらいますよ。

○松本吉生委員 やはり時間がかかるとか、ゴールが見えないと、やはりなかなか皆さん、お忙しい中なので、新しいこととか変えていこうということが少ないと思うのですが、そういうものを何か行政の方も産業界の方も一緒になって、一気に解決されるような仕組みがあったらいいと思いました。

○鈴木誠協議会長 余りその成果というか、でき上がりばかりを期待するのではなくて、先ほどマインドということのを大事にしないかという話もされていませでしたか。

○松本吉生委員 マインド。

○鈴木誠協議会長 そういう心持ちというか、気持ちというか、何か仕事を興してみようじ

やないかというチャレンジです。チャレンジャーです。

○松本吉生委員 そうですね。余り気楽に考えられても困るのですけれども、やはり何かしたいという人の気持ちが、「こんなにいっぱい障害があるからちょっとなかなか、時間もないし」ということではなくて、何かアイデアを出した時に、時間がきゅっと詰まって、みんなで考えたらいいものが。例えば今日もそうですよね。いろいろ話しているといろいろ出るという話ですから、こういうような場を何かうまく作れるようになると、そういうマインドがもっと盛り上がるのかなと。

「私もやってみよう、私はこのようにやってみよう、うまくいったけれども、あなたも是非やってみたらどう。」という話になるかもしれない。例えばケーキ屋さんを開くとか、先ほど、石田さんがトマト、ちょっと不揃いなものをもったいないというパートのおばさんが言っていて。でも、それに関わっている暇がない。きれいなものを採らなくてはいけないし、そちらに回す人もいない。もったいないけれどもポイポイしている。でも、何かそういうものをみんなが集まってぱぱっと考えて、「そういうふうに出したらいいのではないの、例えばこんなことをしたらいいのではないの。」ということのある程度時間を短く、みんなで考えてあげる仕組みみたいなものがあるといいのですけれども。あまり夢みたくないことばかり言われてもそれは困るので、難しいところなのですけれども。

○鈴木誠協議会長 どうでしょうか。松本さんのチームの皆さん、加わった河合さんや村松さんや石田さん、いかがでしょうか。

○河合恵元委員 個人ではできない事業がやはりあると思うのです。もうちょっと広い、行政も絡んでもらわなければいけないとか金融機関とか、プロジェクトというものは、やはり市民側から提案しても、提案する場所がないのです。行政の企画課の人なの分わから

ないですけれども、これからまちをつくっていくというところではもちろん考えておられるとは思いますが、市民が考えるビジネスというか地域ビジネスというものを個人的に話しても、それより上に上がっていかないとかという気がするのです。

それを公のところでちょっと考えてみるかというような、そういう場というか仕組みというか、というものがあってもいいのではないかなと思いました。

○松本吉生委員 例えば、新城市はこの前、太陽エネルギー、ひまわりエネルギーという文化会館の上にパネルを設置したり、公民館の上に設置して、それを市民からファンドを募ってやるというような話を、もともとそういうことをやっている会社があって、新城市でもやったということですが、僕もちょっとそういうアイデアに気づかなかったのですけれども、もしかしたら、太陽光のあの話が出てきたときに、市民の方でももしかしたらそういうアイデアを持っていた方がいたのではないかなと。それは業者さんが来てやってくれたのですけれども。もしかしたら、自分たちでそういうことを思いつかれていた、でも一人ではやはりできない、いろいろ縛りがあるからと思ってやらなかった、かもしれない。ちょっとこの前、行政とかいろいろ公的などの屋根を貸すという話が出て、そう思いました。

○鈴木誠協議会長 空き家を貸す、屋根を貸す、田畑を貸す、川を貸す、いろいろな新城市には余剰なものがたくさんあるかもしれない。しかし、それを活用して「何かみんなで始めてみない。」という提案の中から思わぬものが生まれる可能性があるという話ですよ。

それを良しとして、そういうことを応援するという資金的な援助であるとか、あるいは資金ではなくて人の、専門家のお手伝いであるとか、そういうきめ細かなサポート体制あ

るいは情報の共有の場を作っていくことも大事だということですね。

村松先生とか石田さんはどうですか。何かそれぞれ、お気づきのことは。

○村松 東委員 そうですね。今言われたような、こういう一部の方が代表で集まる場のようなものがもうちょっと、意見を出したい人が集まる大きな場があってもいいのかなと思います。直接その意見が通るところというか、それか、インターネットやホームページみたいなものでもいいのかもしれませんが。

○鈴木誠協議会長 なるほど。石田さんはどうですか。先ほど、ビニールハウスの骨組みを木でつくるという話、あれをちょっと、もらったというふうに思いましたけれども。

○石田靖典委員 あれはたしか農業新聞か何かで、東北かどこかで試験的に作ったというものを見て、こういうふうに見えるのだというものを見たのです。

新城市は木が豊富にありますので、木でビニールハウスを作って、観光地ではないですけれども、そういうものがずっと連なっていたら、きれいな観光地になるのではないかなとちょっと思った感じです。

○鈴木誠協議会長 そういう発想からどんどん、着想から広げていって形を作れたら、それはおもしろいだろうという、今日のまずは話題提供をしてもらいました。

どうもありがとうございました。

それでは、今日、時間がもう10分過ぎてしまいましたので、きょうの協議はここまでにしておきたいと思います。

確認ですけれども、新城市がすごく過ごしやすい生活の場となるためにはどのような工夫が必要なのかということや、産業として稼いでいくということだけでも、ヒト・モノ・カネ・情報というものをどううまく組み合わせるような、そんな仕掛けがあったらいいだろうか、あるいは仕掛けということだけではなくて、実際に始めてみる場をどう

作っただけなのかという具体的な話題提供がありました。

では、そのあたりをヒントにいただきながら、今日の議論の到達点がどこなのかということ、一回、事務局で整理して、委員の皆さん全員のところに今日の到達点を一応確認に伺いますので、またチェックしてください。よろしくお願いします。

事務局の、課長もそういうことでよろしいでしょうか。

○事務局 はい。

○鈴木誠協議会長 では、これ以降は事務局にお返ししますのでお願いします。

○白井副課長兼商工政策係長 それでは、4番目のその他でございまして、部会についてというふうにならなくて書いてあるのですけれども、これにつきましては、済みません、まことに申しわけございませんが、次回の会議でもう一回ちょっと、こちらでもう一回考えさせていただいて、次回の会議でお話しさせていただきたいというふうに思っておりますので、まことに申しわけございません。

それで、次回の会議予定でございしますが、こちらは8月下旬というふうにならわせたいただいておりますが、9月上旬になるかもわかりませんので、また日程が決まり次第御連絡を差し上げますのでよろしくお願いします、という2点でございます。

以上でございます。ありがとうございます。

○鈴木誠協議会長 冒頭も言いましたように、次は9月にするとしても、1カ月以上あるので忘れてしまう。ですから、きょうまでの議論の成果と、それから次に持っていくところをお一人一人確認に、最低1回は行きますので、場合によっては2回ぐらい行くかもしれません。そこでアイデアを出していただいて、そして次につなげていくというふうにして、すき間のない協議会にしていきたいと思っておりますので、どうぞ御協力をよろしくお願いします。

す。

では、また日程については皆様方に相談させていただいた上で決めます。

では、どうも今日はありがとうございました。